

滑稽目雜抄

酉下

特別
~ 5
6326
16



滑稽雜詠卷之十六目錄

八月部下

初毛見	日	雲山子	日	板鴨	子	三	稻小屋	編	塚
稻風 稀る	日	碓	日	下葉	日	新酒	新	日	新
六新蕎麥	日	秋給	七	衣類	日	鷹	日	鷹	日
日 小名渡	日	馬	日	野	日	海	日	海	日
日 鴨	日	鴨	日	鴨	日	鴨	日	鴨	日
五 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
无 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
日 練雀	日	練雀	日	練雀	日	練雀	日	練雀	日
三 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
日 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
日 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
日 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
日 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
日 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
日 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日
日 鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日	鶉	日

世鹿	世二	世三	世四	世五	世六	世七	世八	世九	世十	世十一	世十二	世十三	世十四	世十五	世十六	世十七	世十八	世十九	世二十
鹿	あまのま	江	鱧	江	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧
鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧	鱧

六九 冬瓜 日 紫花
 七一 莫羅 日 紫花
 七三 菜 日 紫花
 六六 粟 日 紫花
 五九 蒲 日 紫花
 五八 蒲 日 紫花
 五七 蒲 日 紫花
 五六 蒲 日 紫花
 五五 蒲 日 紫花
 五四 蒲 日 紫花
 五三 蒲 日 紫花
 五二 蒲 日 紫花
 五一 蒲 日 紫花
 四九 蒲 日 紫花
 四八 蒲 日 紫花
 四七 蒲 日 紫花
 四六 蒲 日 紫花
 四五 蒲 日 紫花
 四四 蒲 日 紫花
 四三 蒲 日 紫花
 四二 蒲 日 紫花
 四一 蒲 日 紫花
 四〇 蒲 日 紫花
 三九 蒲 日 紫花
 三八 蒲 日 紫花
 三七 蒲 日 紫花
 三六 蒲 日 紫花
 三五 蒲 日 紫花
 三四 蒲 日 紫花
 三三 蒲 日 紫花
 三二 蒲 日 紫花
 三一 蒲 日 紫花
 三〇 蒲 日 紫花
 二九 蒲 日 紫花
 二八 蒲 日 紫花
 二七 蒲 日 紫花
 二六 蒲 日 紫花
 二五 蒲 日 紫花
 二四 蒲 日 紫花
 二三 蒲 日 紫花
 二二 蒲 日 紫花
 二一 蒲 日 紫花
 二〇 蒲 日 紫花
 一九 蒲 日 紫花
 一八 蒲 日 紫花
 一七 蒲 日 紫花
 一六 蒲 日 紫花
 一五 蒲 日 紫花
 一四 蒲 日 紫花
 一三 蒲 日 紫花
 一二 蒲 日 紫花
 一一 蒲 日 紫花
 一〇 蒲 日 紫花
 〇九 蒲 日 紫花
 〇八 蒲 日 紫花
 〇七 蒲 日 紫花
 〇六 蒲 日 紫花
 〇五 蒲 日 紫花
 〇四 蒲 日 紫花
 〇三 蒲 日 紫花
 〇二 蒲 日 紫花
 〇一 蒲 日 紫花



滑稽雜談卷之第十六

八月之部

四時堂其謗編錄

○毛見

○日本紀卷廿曰持統天皇五年三月

壬申朔癸巳詔曰朕將巡行紀伊之故勿收今年貢師田

租口賦未見田租口賦紀○同日花實之毛

則三韓上腴季○禮記月曰仲秋之月乃余有司趣民收

歛○孟子王曰天子適諸侯曰巡狩巡狩者巡所守也

注巡所守巡行諸侯所守之土也又春秋循行郊野察民

之所不足而補助之○穀梁傳曰凡地之所生謂之毛○

博物志曰地以名山為輔佐石為之骨川為之脈草木為

之毛土為之肉○周禮曰司稼掌巡郊野之稼而弁種桂

之種周知其名与其所宜地以為法而縣中于邑國巡野觀

稼以年之上下出錄法掌均万民食而調其給而平其真

○和信の毛尺と秤と上は巡行巡狩の事也也秋の田圃の

△鳴榔

○能恒極其鳴榔之云々鳴榔者何也
をりして洋里小聲をいふをいふは後を述べてもさういふは
同榔可也これとあはれども言質は鳴榔はらうと云ふは

△澤舟

○同榔云々舟は澤舟と云ふは舟の
秋と云ふはさういふは舟の澤舟と云ふは舟の澤舟と云ふは
之のさういふ

曰 我々も舟のさういふは舟の澤舟と云ふは舟の澤舟と云ふは

△捕魚

○同榔云々舟は澤舟と云ふは舟の
さういふは舟の澤舟と云ふは舟の澤舟と云ふは舟の澤舟と云ふは
曰 舟のさういふは舟の澤舟と云ふは舟の澤舟と云ふは

○稻小屋

○三才口會曰守舎者禾廬也燥木苦
草略成構結兩人可捍禾稼將熟寢處其中備防人畜或
就膝坎縛草為之若於山脚曠野之地宜高架牀木免有
虎狼之患真西言農事之叙云至其禾迨垂穎而堅粟懼

人畜之傷殘縛草田中以為守舎數尺容膝僅足蔽雨寒
夜無眠風霜破骨此守禾之苦也○是和也さういふは舟の澤舟と云ふは

万十 秋乃田畔借庐作音入為而有屋若呼將見依老欲得 此言律
後獲 杜の向のりり舟の澤舟と云ふは舟の澤舟と云ふは

△稻像

○詩經楚曰我黍与々我稷翼々我
倉既盈我庾維億注露積曰庾○三才口會曰庾鄭詩箋
云露積毀也集韻曰庾或作庵倉無屋者詩曰注云蓋謂
庾積穀多也 是和也さういふは舟の澤舟と云ふは

△稻木 楊柳

○三才口會曰笕切浪架也集韻作
笕竹竿也今湖湘間收禾並用笕架縣乏以竹木構如屋
狀若麦若稻等稼獲而糞音之悉倒其穗種於其上久雨
之際比於積塼不致攪混又曰喬杆音掛禾具也凡禾多
則用笕架禾少則用喬杆○多識篇曰喬杆伊計○是又

耐○宗爽衍義曰戰國策曰帝女儀狄造酒進之於禹說
 文曰少康造酒即杜康也然本草已著酒名素問亦有酒
 漿則酒自黃帝始○時珍本草曰酒天之美醖也誨許氏
 說文云酒就也所以就人之善惡也一說酒字篆酒在鹵
 中之狀○按少康造酒之方亦禹一和也又其始作也
 未盡烏有也八種の酒を醸し酒を造るを造るなりと云ふ
 言多能多との耐はあつ耐はあつ耐はあつ耐はあつ耐はあつ
 和信の撰に造りて酒を造るものなり耐はあつ耐はあつ耐はあつ
 たりふ新穀造りて酒を造るものなり耐はあつ耐はあつ耐はあつ
 たりて酒を造るものなり耐はあつ耐はあつ耐はあつ耐はあつ耐はあつ
 とのなり耐はあつ耐はあつ耐はあつ耐はあつ耐はあつ耐はあつ

△新常

韻會曰常酒家幟今日望子○

韓非子曰宋人有沽酒者斗繁甚平遇客甚謹為酒甚美
 懸幟謂之酒旗甚高而酒不售遂至於酸所謂懸幟者

此也○容齋隨筆曰今都城及群懸酒勢凡鬻酒之肆皆
 揭大常於外以青白布數幅為之微者隨其高卑小大村
 店或掛瓶瓢標常桿唐人多詠於詩然其制蓋自古然矣
 ○三休詩抄曰酒旗銘曰日邊有寺時千八口王程兩人
 上木來七山相並此十月欲斜有火燒羊脚美水边有酒
 酒時程來此有美酒七字也○和子於寺有酒常也云也
 酒家の新掲也今於酒林と稱し招きと云ふ意瓶の
 形を以て酒旗と稱し新常と云ふ部地は秋月新酒を造る
 幟を掛或は招き標を以て酒旗と稱す也其形も亦新
 此を考ふべし ○或老人曰酒家酒常と稱す酒の形を以て
 鞠に似て酒の形を以て酒旗と稱す也其形も亦新
 乃字も亦いひ酒の形を以て酒旗と稱す也其形も亦新
 故酒家酒常の形も亦新也又或は酒常と稱す酒の形を以て
 包りて酒の形を以て酒旗と稱す也其形も亦新

動若起若止投之以石是心專於禽而欲獵之甚也○
其形習之極也強乎此動凡也乎也羽之利其身也輕之の心也
信也也乎也強事也の習を結と云新雁とくうい鳥之新雁は心を
信とくく結とく物也

○小鳥渡 鳥名 ○神代卷の少鳥渡は鳥之小鳥と申す新也

鳥名とくく結とく鳥とく鳥とく ○
鳥名今鳥を仰也強事也の詞也
鳥名今鳥を仰也強事也の詞也
鳥名今鳥を仰也強事也の詞也
鳥名今鳥を仰也強事也の詞也
鳥名今鳥を仰也強事也の詞也

○鴈 神代卷曰川雁 月令曰仲秋之

月鴻雁來 又曰季秋之月鴻雁來賓 注雁以仲秋先至
者為主季秋後至者為賓如先登者為主人從之以登者
為客 又注曰孟春言鴻雁來自南而來北也此言來自

北而來南也 ○儀禮曰凡大夫贄用雁 々々 有前從後列故
以為贄 ○昏義曰壻執雁入揖讓升堂再拜奠雁 ○宗奭
衍義曰雁以就和氣所以為禮幣者一取其儀二取其和
也 ○時珍本草曰按禽經云鴉以水言自南而北鶻以山
言自北而南張華注曰鴉鶻並音雁冬則適南集于水干
故字從干春則嚮北集于山岸故字從岸小者曰雁大者
曰鴻 々々 大也多集江渚故從江梵書謂之僧婆雁狀似鶻
亦有蒼白二色今人以白而小者為雁大者為鴻蒼者為
野鶻雁有四德寒則自北而南止于衡陽熱則自南而飯
于雁門其信也飛則有序而前鳴後和其禮也失偶不再
配其節也夜則群宿而一奴巡鶻昼則啣芦以避繒繳其
智也而捕者秦乏為媒以誘其類是則一愚也南來時瘠
瘦不可食北嚮時乃肥故宣取之又漢唐書並載有五色
雁云 ○
雁云 ○
雁云 ○

之方と有り無と有り一見之方を交うる所の雁也○一既白とある所の
 國の人眉目ありあゆみ厚の羽をぬきて経路を付り居り云々○
 左の雁書居る所より五を産つ居りあるもの一信金と白雁書の
 居り少く少く或は和れ横坂を産す文昌雜錄曰北方有白雁秋
 雁別名と云城も少く有居る書白雁ありあゆみ少く居り
 少く後撰目録は居る所より中より居る白雁を居り○今抄は
 居る所より居る所より秋の雁居る所より居る所より居る所より
 詩の海居る所より居る所より居る所より居る所より居る所より
 居る所より居る所より居る所より居る所より居る所より居る所より

万十 秋凡尔山跡部越雁鳴矢射去遠故云隱首 作去書師
 二書書 山の雁鳴矢射去遠故云隱首 作去書師
 可く書書 山の雁鳴矢射去遠故云隱首 作去書師

○嫩良安日按禽經云駢和秋苗以水言自北而南鴈和
利加以山言自南而北右者稱為陽鳥實者陰鳥也○真

雁蒼黑而胸腹有白黑斑其嘴白脚黃其肉脂多美○白
 腹即真尸未長而腹白無斑故名臙白其肉軟極美○雁
 金大如白腹雁而全臙蒼黑額白眼边黃嘴赤而細其脚
 黃也稀捕之其肉稍劣○白雁全臙白而翅翮黑嘴与脚
 赤色其肉脂少○凡中秋白雁先來而尸金次之真尸又
 次之遲仲春真尸先飯而三四月白尸飯俱雌雄相並為
 行列如失偶則唯一羽來往余凡夜止宿中每更換居謂
 之打更

△雁書

○前漢蘊武字子卿杜陵人武帝
 時以中郎將持節使匈奴單于欲降之迺幽武置大窖中
 絕不飲食天雨雪武臥齧雪与旃毛并咽之數月不死匈奴
 奴以為神乃徙武北海無人處使牧羝羝乳乃得飯武杖漢節
 牧羊臥起操持節旄尽落昭帝立匈奴与漢和親求武等
 匈奴詭言武死常惠教漢使者言天子射上林中得雁足

有孫帛書曰在某沢中由是得還全文見○文體曰古篆

隸文體有懸針書垂露書雁書虎爪書鶴頭書○鳥頭

田中今秋、秋風、雁、今、令、ま、ま、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

獲、む、胡、由、ま、り、り、り、一、雁、の、ま、ま、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

その、ま、ま、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

今、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

○今、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

今、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

今、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

今、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

今、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

今、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

今、あ、ひ、つ、ま、と、て、ま、り、ん、を、

△雁風は落雁木

○或説曰神國の海濱にて雁の枯骸の

時、雁の銜り、イキ枝木を食する時、海濱の志を、

新と云ふことを、落雁と名づく、

下中と稱す、

○徐表南洲記曰落雁

木、生南海山、野中蔓生、四边如刀削、

○時珍本艸曰落雁

木、或云雁喙至、代洲雁門而生、

△野雁

○詩經 曰肅々鵝行、集干苞

桑注故名獨豹而訛為鵝也、陸佃云鵝性群居、如雁有行

列、故字從𠄎、𠄎々者保相次也、詩曰鵝行、是也、鵝、水鳥也、似

雁而斑、文、無、后、趾、性、不、木、止、其、飛、也、肅、々、其、食、也、鶩、肥、臚、

多、脂、肉、粗、味、美、閩、語、曰、鵝、無、舌、兔、無、脾、或、云、純、雌、無、雄、与、

他、鳥、合、或、云、鵝、見、鷖、鳥、激、糞、射、之、其、毛、自、脫、也、

○多識篇

○多識篇

九月之其姓雁の使牛毛念念不可國本奴鴨 道行保井王

日鵝形 ○古物類事曰鵝ハカニ居ル似テ居ル之ニ凡クあるは後趾
 有味而養脂多シ西別ノテ此鳥ト云地邦有リ中葉國目轉リ
 集解ハハカニ居ルハ同 ○今按ハ多徴鳥ト云ハカニ居ル ○補良
 安曰鵝俗云野雁也頭頸灰白色嘴端黒其背有黄脊紫
 豹文翻潔黒腹正白脚掌蒼黒無后趾及蹠九列捕之作
 揚子箭羽或茶會帚其彪一之字者貴三才口會曰鵝性
 淫而無定匹故今指老妓曰老鵝云云據此則非全無雄
 者而性多淫者

△海鴈

○古物類事曰海鴈在海是犬比其鳥
 似也色如雁色味乃定也其頸有白毛翅ハ短シ也

△白鴈

○文昌雜錄曰北方有白雁似雁
 而小色白秋深則來 ○古今詩話曰北方白雁秋深來則
 霜降 古物類事曰白鴈ハ多ク居ルハ也少坐及鳥飛ハ極速
 多シ文昌雜錄云ハカニ居ルハ也少坐云云 ○又曰其類ハ鵝

居ルハ多クハ一信雁ハ後ノ毛落ルハ居ルハ味者居ルハ後羽ハ鵝ト
 不羽又運類鵝ト云テ其類乃異別トモハカニ居ルハ後羽ハ鵝ト
 よりハ也目ヤリ者ハ鵝ト云居ルハ今ハハカニ居ルハカニ居ルハ
 頭ヤリ國字ハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハ

鴻

○說文曰鴻鵠也大曰鴻小曰雁
 隨陽之鳥 ○唐太宗詩曰晨浦鳴飛雁夕渚集棲鴻 ○時
 珍曰大者曰鴻鴻大也多集江渚故從江梵音謂之僧婆
 ○多識篇曰鴻於保加利又云比志久伊 ○今按ハ頭和ハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハ
 之加利ハ別ノ鴻ト云ハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハ
 ハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハ
 洪ト稱テ秋ト云テ其目ヤリ者ハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハカニ居ルハ
 種有稱惠登菱喰者或稱沼太郎又曰酒類大概与菱喰
 同而眼上有淡白條皆脚皆黒 ○良安曰鴻狀類厂而大

背頸俱灰色翮深黑其尾本白未黑腹白脚黄紫黑而鼻
边有黄條其肉味不劣於厂脂亦多臭香有雀肉 一種
有加豆羅菱狀小於鴻而背頸俱灰色頸有柳色駸腹白
紫正黑而篇其翮尾皆同鴻

○海燕

○月令曰仲秋之月玄鳥歸注此
言飯明春來而秋去也 ○淮南子曰燕春分而來雁春分
而去燕秋分而北雁秋分而南 ○潘岳秋賦賦曰野有飯
燕 こけの泣けし海鳥は秋後之世信り燕とすも秋のこけ
そ習をきてん家のなほそ集居そまの同燕雛をそ集居
及て乳を雛を二日受とそり皆枯むて羽を成てて色は紫を
備えんとすり時以雛をまてたのそめあむる信りそそは後有
小葉をそそそと乳燕とそ有り

○鴈

○鴈

○詠文曰鴈知天將雨則鳴 ○玉

篇曰鴈音箠野鳥也 ○陳藏器拾遺曰鴈如鶉色蒼紫長
在泥塗間作鷓々音聲村民曰田雞所化亦鷓鴣類也蘇
秦所謂鷓鴣相持者即此 ○時珍本草曰今田野間有小
鳥未雨則鳴者是矣 ○順和名曰鷓鴣揚氏云之木 ○大和同鷓鴣
大和鷓鴣亦鷓鴣以後之鷓鴣七八月味最劣之鷓鴣
也くち鷓鴣小鷓鴣皆の毛茶褐也そそそそ鷓鴣尾の
黒みの鷓鴣の素小ゆ又も肉臭く味劣此亦尾白小鷓鴣小鷓鴣
胸黒トウ子頸赤し程程有り ○今按今按小鷓鴣小鷓鴣
順和物も玄鷓鴣の字を用ひも陸奥物も田舎もとそ
と作る事も多しや中野の事も鴈の字も多し
鷓鴣小鷓鴣此は此の鳥なり秋の鳥なり

△竹雞

時珍本草曰竹雞一名山茵子
言味美如茵南人呼為泥滑々因其声也多居竹林形比
鷓鴣差小褐色多斑者文其姓好啼見其傳必闕捕者以

みのり長末の玉の雌者儲承の書ありて解ありをひらき者
 時晴ありては鳥をばしめて垣たしてえいけてゆらぬを
 こゝろまゝに在るのち時繁茂の中細きつゝ人肉書はしりてさうせ
 て通ひつらつていんをまぬらうをばしめて娘をばしりて
 暇の時をばして甲をばしてさうせ暇をばして我々の言をばし
 てもばしりてあつていんをばしりてさうせ暇をばしてあつて
 海平の扱男をばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 とさうせ暇をばしてあつていんをばしりてさうせ暇をばして
 とさうせ暇をばしてあつていんをばしりてさうせ暇をばして
 多しあつていんをばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 暇をばしてあつていんをばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 果此中ありて書ありてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 暇をばしてあつていんをばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 の時をばしてあつていんをばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて

乃亭といふものなり物をばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 乃亭といふものなり物をばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 乃亭といふものなり物をばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 乃亭といふものなり物をばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて
 乃亭といふものなり物をばしりてさうせ暇をばしてあつていんをばしりて

○良安三才口會日保登鵲 大似鶉而長嘴長黒色脚
 亦長黄色頭背灰色白彪斑翎灰色胸腹白尾黄赤有黒
 紋其肥大握羊而有餘可三指者家賞之其味不減干鳧
 △胸黒鵲 頭背翅尾黒而有黄斑胸灰色黒而有黒斑腹白
 嘴短於保登脛長於保登俱蒼黒色肉味悪保登

△直鵲一名 嘴長 似保登而小但脚与嘴長為異

△赤鵲一名 嘴長 頭背翅灰色黄斑眼大外有白圈嘴短而

嘴共灰色黒色

△黄脚鵲一名 頸球 頭背胸翅背灰白帶浅青腹白色頸卷白

輪故名頭珠鵲背黑脛深黃色故名黃脚鵲

△京女鵲

頭白而灰斑色眼傍有黑條背根有白口
文此背黑大頸後胸間有白條成列背上翅間帶赤色翎羽
黑脛白尾赤白而有黑文脚赤而掌有黑斑

△羽斑鵲

頭頸赤色眼四邊白如弦月紋胸前有二
黑條夾白條皆黑有白紋如鱗形翎羽黑有黃口星紋尾
淺紫有黃口紋腹白紫脛綠色

△抄鵲

大如鳧頭背灰白而有黑斑腹灰白尾有
淺黑紋成列畧似鷹尾脛掌純黑其背蒼黑白最長未反
曲向上如匙杓形故名其大者号大杓小者号加祢久伊

△山鵲

雌鳴

大於杓鵲而頭頸胸背灰紫色有黑斑翅
尾亦同色而有黑鐵紋腹赤黑斑似雌雉之色背長而黑
斑灰色常在山田溪澗故名山鵲○其餘有登宇称木雀
鵲草鵲等數品不尽述右全文
大石補○按多鵲小如別之能て胎

部より好むると此の鵲の好むると
大石より望み海老の海鵲の目撃し對するもの
とすやあとの鵲とをゆゑるゝとわづらひて秋の事
補

○鶉

○詩經曰鶉之奔奔注鶉鶉屬也

○月令曰田鼠化為鴽注鴽鶉屬之屬○劉禹錫食經曰

鶉蝦蟇所化也揚億談苑云正道二年笈秋汴人鬻鶉者
車載積市皆蛙所化猶有未全變者列子所謂蛙声為鶉

也○宗奭曰鶉其印初生謂之羅鶉至秋初謂之早秋中
秋已後謂之白唐鶉有雌雄常於田野屢得其卵何得言

化也○時珍本艸曰鶉性醇竄伏淺草無常居而有常匹
隨地而安莊子所謂聖人鶉居是矣其行遇小草即旋避

之亦可謂醇矣其子曰鳩鶉大如雞雞頭細而無尾毛有
斑點甚肥雄者足高嶋者足卑其性畏寒其在田野夜則

群飛晝則草伏人能以声呼取之畜令闘搏萬早術云蛙

く持てをききてありたりしけいふもく ○神代卷日鷗名初物
ありきと新成り物をもつてさうし秋の部入りし兵備人の種よき物を
云はし秋のまを物とせしむるなり ○或は鷗をいひ初色の名と
是と扱ひ首より尾にわたるの鷗をいふ事とせし初色の物と
せん九色ありしけりし鷗をいふ事とせし初色の物とせし
初色の物とせし初色の物とせし初色の物とせし初色の物とせし
夫亦衣今も初物なり軍の備はして秋をいふのむしりん 彦花

○鷗

其術時右鷗鷺飛來搖其首尾二神見而学之即得交道
詩經曰眷令在原注眷令雛渠水鳥也飛則鳴行則搖
有急難之意 ○崔禹錫食經云鷗鷺貌似鶩而高飛作声
者也 ○三才口會曰釋鳥云鷗鷺蓋雀之屬飛則鳴行則
搖大如鷗長脚尾腹下白頸下黑如連錢故杜陽人謂之
連錢物類相感志曰俗呼雪姑其色蒼白似雪鳴則天當

大雪

○順和名曰鷗鷺積矣二音字或作鷗鷺和名尔波平之因止里
○小字物名鷗鷺鳥也
云はし秋のまを物とせしむるなり ○或は鷗をいひ初色の名と
是と扱ひ首より尾にわたるの鷗をいふ事とせし初色の物とせし
せん九色ありしけりし鷗をいふ事とせし初色の物とせし
初色の物とせし初色の物とせし初色の物とせし初色の物とせし

夫亦衣今も初物なり軍の備はして秋をいふのむしりん 彦花
日 鷗をいひ初色の名とせし初色の物とせし初色の物とせし

○祿良安日鷗領狀類燕而青灰色頸下眼後有黑條長
尾尖嘴腹白胸有黑文每鳴于水边求匹能搖首尾字彙
云首尾相応比兄弟一名雛渠是也 黃鷗鷺胸正黄色
脊黑鷗鷺背正黑色 白鷗鷺背白項黑樊中貯水石以
畜之亦能馴孚持以白者為珍

△稻負鳥

○順和名曰万葉集云稻負鳥其讀以奈於保世度里
○鳥名也云云

此鳥之性... 可思惟之

○ 鷦鷯

詩經曰肇允彼挑鳥拚飛維鳥注挑鳥鷦鷯小鳥也鳥大鳥也鷦鷯之雛化而為鷦故古語曰鷦鷯生鷦言始小而終大也○時珍本草曰按爾雅云挑鳥鷦其鳴曰鳩揚雄方言云自閩而東謂之巧雀或謂之女近自閩而西謂之襪雀或謂之巧女燕人謂之巧婦江東謂之挑雀亦曰有呼鳩性拙鷦性巧故得諸名生蒿木之間居藩籬之上狀似黃雀而小灰色有斑聲如吹噓喙如利錐或茅葦毛毳為窠大如雞卵而繫之以麻髮至為精密懸於樹上或一房二房故曰巢林不過一枝每食不過數種小人畜馴教其作戲也○順和名曰鷦鷯和名佐○下學集曰鷦鷯栖溝三歲故日本呼溝三歲和名...

乃... 文選鷦鷯賦華張...

○ 良安曰

按鷦鷯形狀如上說而脚黑微赤其窠以髮繫之以麻絛之精密如刺襪然故有襪雀巧婦等之名而和名抄鷦鷯佐々巧婦鳥止久米如為二物者非也仁德天皇諱号大鷦鷯降詠曰此鳥以入宮殿也和列洞籠川山中多出雛城列岩間拱列有馬亦之之今人家養之形極小而色大也性畏寒難育

○ 鷓鴣

○ 蕪頌口經曰鷓鴣形似母雞頭

如鷓鴣前有白口點如真珠背色有紫赤浪文○時珍本草曰鷓鴣飛必南翥者南曰懷南江左曰遂影張華注云鷓鴣其名自呼飛必南向雛東西回翔圍翅之始必先南翥其志懷南不徂北也性畏霜露早晚稀出夜栖以木葉蔽身多對啼今俗謂其啼曰行不得哥也其性好潔獵人

因以糶竿粘之或以媒誘取○薄徒名也白鷓鴣と云名了んじ
くんとくく名也仍も秋の事なりんおまありくと皆中、有るふてを
乃ぞとてさくつり好、おま名は名をの知りありは、のより作れ
さひとつりばさの信は似たりとくはありは、はさ氏をりかき
いふのの信○今按、昔は名邦よりりむく海、信りて是を信
の秋の少く、鷓鴣と稱し、昔海、く是邦のもの、あ、秋の信の
稱し、腫あ、白然ありとよくはる

未知然乎否近年亦有来於中華家為珍
○鷓鴣鷓鴣とらつちのうり毛の紅らつ、おまありつり
○說文曰鷓鴣或云似鴝○廣韻

日唼唼鳥 列子曰鷓鴣不踰濟○時珍本草曰王氏字
說曰為其行欲也尾而足勾故曰鷓鴣從勾從欲有亦通
唼唼其声也巢於鵲窠樹穴攻人家屋脊中身首俱黑兩

翼下各有白點其舌如人舌剪剔能作人言嫩則口黃老
則口白頭上有幘者亦有無幘者周禮鷓鴣不踰濟地氣
使然也○多識篇云鷓鴣今案比与登利○和ありとよの既
ふんまゆれとわつ、今をりそ舌を去の既まゝ又鷓の字を信、
とらつ、そつ物、やばさる、日、唼この字をさり、秋の海、さく
われ、おまありつり、し、主、信、あり、ひえ、とく、わく、ひり、とら、
おまありつり、鷓鴣をぬて、く、あり、ひえ、とく、わく、ひり、とら、
ひえ、とく、わく、ひり、とら、○とら、おまありつり、
鳥、ひえ、く、し、信、あり、とら、ひえ、とく、わく、ひり、とら、
とら、ひえ、く、し、信、あり、とら、ひえ、とく、わく、ひり、とら、

○鷓鴣鷓鴣とらつちのうり毛の紅らつ、おまありつり
○鷓鴣鷓鴣とらつちのうり毛の紅らつ、おまありつり
○鷓鴣鷓鴣とらつちのうり毛の紅らつ、おまありつり

樊中賣之雌者胸腹之斑色不鮮翻黑其裏插色 眉

白鴿鴿形狀同鴿鴿而眉白者

○鴿（三上リ） 順和名曰雀禹錫食經曰鴿名和

比衣 貌似烏而蒼白者也尔雅集注云鴿一名鶩音一一名

鴿音一一名鶩音一而多群腹下白者江東呼為鴿鳥○摺

（三上リ） 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一

少鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一

中可○良安曰鴿形似鴿鴿而尾長灰色頭上毛乱起

眼边帶微赤色胸臆灰青腹下灰白俱有黑斑紫黑而利

脚胫短掌亦蒼黑色常成群飛啼喧叫其声如言奇異々々

々好食草木子或曰食山茶花而腸消此時炙食則肚無

腸味寂其美○又曰凡草木種蔣難生者采其实令鴿啄

之取全出於糞中子蔣則無不生也鴿性黠不羈糝揆適
着揆則倒絕下俟糝離去如中罟網亦逸去故不用常罟
別作小罟設揆下挿之其罟如深囊謂之鴿網

○菊戴（調族） 日本事跡考曰鴿 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一 鴿音一

○三才口會曰白頭翁形似鴿鴿其飛似燕之頰頰頭上

有白毛身蒼色宋魏野有白頭翁詩○大如也（音一）

鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一） 鷓鴣（音一）

○良安曰菊戴鳥狀似眼白鳥而背翅青綠色頂上戴黃

色如花者故名之眉边有黑斑翅端尾黑腰腹白背灰白

脚灰黑其声如曰豆伊々々而短小性怕寒難育

○練雀（音一） 禽經曰冠鳥性勇纓鳥性柔帶

鳥性仁張華云帶鳥練雀之類是也今俗呼為梔白練○

雀禹錫曰練雀似鴿鴿而小黑褐色食槐子者佳○時珍

古名也。不。鴉。鴉。の。如。り。と。一。も。は。之。の。羽。毛。と。以。て。之。を。く。り。新
二。種。と。し。て。○。嶽。良。安。曰。鳩。俗。云。加。形。小。在。池。川。捕。魚。翡
翠。俗。云。也。未。世。美。形。大。在。山。溪。捕。魚。其。穴。窠。也。橫。入。一。尺。許。雜。生

於其中

○桑鷹

○詩經曰交々桑鷹有鶯其羽注

桑鷹竊脂也俗呼青嘴肉食不食粟○時珍本草曰鷹意
同鷹止也左傳女皞氏以鳥名宮九鷹為九農正所以止
民無淫也桑鷹乃鷹之在桑間者也其嘴或淡白如脂或
疑黃如蠟故古名竊脂俗名蠟嘴淺色曰竊陸機謂其好
盜食脂肉殆不然也處々山林有之大如鴿鴝蒼竭色有
黃斑點好食粟稻詩云是矣其嘴喙微曲而厚壯光室或
淺黃淺白或淺青淺黑或淺玄淺丹鷹類者九種皆以喙
色故色音別之非謂毛色也爾雅去春鷹鴿鶻夏鷹竊玄
秋鷹竊藍冬鷹竊黃桑鷹竊脂棘鷹竊丹行鷹暗々霄鷹

噴々老鷹鶻々是矣今俗多畜其雛教作戲舞○古名也
高桑鷹也一名竊脂又鴉鶻雀と云はまよふりや那信
鶻と云ふはまよふりやまよふりやまよふりや
利と云ふはまよふりやまよふりやまよふりや
阿止里と云ふはまよふりやまよふりやまよふりや
二と云ふはまよふりやまよふりやまよふりや
句と云ふはまよふりやまよふりやまよふりや

○嶽良安曰桑鷹狀小於鳩頂黑腹背灰青色羽未黑有
白斑嘴微曲而厚淺黃白色尾短好食豆粟故名豆美
為豆常鳴春月能轉如言比志利古木利和名抄鶻

○揚子鳥

○日本紀曰天武天皇七年
揚子鳥蔽天自西南飛東北○順和名曰弁色

立成云鵲背鳥阿土里一楊氏漢語救曰鴛子鳥和名上

西說所出未詳但本朝回史用鴛子鳥之或說云此鳥群飛如列卒之滿山林故名鴛子鳥也○古名鴛子鳥

鴛子鳥漢名鴛子鳥○古名鴛子鳥

是雀鷹の目れ之或云鴛子鳥○古名鴛子鳥

賦三才口會曰蠟背鳥似雀而大背如黃蠟色故名能欲

舞聽人曲調則以背啣紙糊臉子撒演法戲彩腔換套必

按音節又有種鉄背鳥○食鑑曰鴛子鳥大如雀頭灰青

色有黑斑領背黃赤背蒼黑帶赤有黑斑臆腹赤色帶黑

腹下黃白翅尾黑脚黃赤色好成群而不知幾千萬蔽地

掠天而飛今捕之者為媒誘地以細打而捕之一舉數百

其味苦不佳

○爾雅曰啄木一名劉木鴛也有

大有小有褐有斑褐者褐是雌斑者是雄剛凡利背舌長寸

秒有刺針穿木食蠹○時珍本艸曰此鳥劉裂樹木取蠹

食故名禽經曰裂志在木鴛志在木矣小者如雀大者如

鴛面如桃花喙足皆青色剛凡利背々如錐長數寸舌長

於味其端有針刺啄得蠹以舌鉤出食之博物志曰此鳥

能以嘴畫字令虫自出魯至剛云今閩廣蜀人巫家收其

符字以收驚療瘡毒也其山啄木頭上有赤毛野人呼為

火若鴛能食火炭王元之詩云淮南啄木大如鴛頂似仙

鶴推丹砂即此也○古今異傳曰啄木本雷公採藥史化

為此鳥○順和名曰劉木和名天良○天良

身厚長尾愛氣惡人多以之似○天良

此て悉進らるる今の啄木と云ふ也○天良

○天良

○天良

○天良

○天良

○天良

而黃俱有黑斑背翅尾黑白成橫彪或青色亦有其暉紅
 腹白而有汰黑彪背脛皆黑色剛凡利背如錐長數寸舌
 長於喙其端有針々頭如鋸齒啄樹中蠹以舌探出而食
 之但旦夕穿木不息耳
 鴿之小者舌長於背啄蟻及
 木蠹俗名蟻吸鳥木竹所謂小者如雀者是乎

○火鴿鳥

○漢名未知 ○大和和鳥出續言

大和和鳥頭之尾也唯のよりく背は淡紅色胸と腰は黄と翅の黒
 と嘴の赤く入り種をたつたより形を同也 ○その林に到ては深山
 の ○大石 和鳥の字事 鶺鴒の字とせり (良書百種) 信鳥の俗名なり
 又鶺鴒の字とる也

鳥木 百鳥をみたるより出續言 大和和鳥は鳥の類なり 西見

○嶽良安曰鶺鴒大如雀而頭黑有白彪 俗曰霜 頰頰正黑
 背翻灰赤有黑斑翅上有白羽黑羽層々背脚蒼黑其声
 清亮多囀如曰比伊古止比伊古止 黃鶺鴒狀小而頭黑

眉黃鵠頰胸腹亦皆黃自眼後至背純黑背後腰間並黃
 翅尾純黑而翅間有白羽三四箇其声亦清亮

○鶺鴒

良安百舌鳥訓 ○順和名曰唐韻云鶺鴒 漢語抄
豆久見并色 立成云馬鳥 鳥名也 ○大和和鳥曰鶺鴒 漢語抄 鶺鴒鳥

之下種を狀通し今和鳥名に似たり 鶺鴒 他の鳥の名に似
 る鳥と云ふ事なき 鶺鴒 胸布あるが如く 鶺鴒 舌の黒
 きつゝこれ 鶺鴒 性佳し 鶺鴒 和鳥の類 鶺鴒 出續言 ○
 和鳥の名 鶺鴒 語 鶺鴒 鳥 鶺鴒 鳥 鶺鴒 鳥 鶺鴒 鳥 鶺鴒 鳥

○嶽食鑑曰鶺鴒大似伯勞頭背胸臆紫灰色腹黃白有紫
 黃斑羽尾黑背脛蒼蒼每棲山林而能囀性好食蟻蛭故捕
 之人先多削竹木塗黏為架以夾樹枝或張羅於林間用

絲繫螻蛄著竹竿而掉之則群鶉見螻相集竟羅羅撲此俗
謂舞鳥馬或曰鶉食山茶花而腸皆盡山茶者椿也此時
人教鶉用嘴入臂拔羽毛多食則肚無腸而味最佳予每
試之有驗 黑鶉狀似鶉而灰黑色有黑斑頭純黑毛羽
尾亦黑頰白嘴脛黃每棲山林能囀作百鳥之聲食魚鳥
肉故人畜之樊籠以弄之 良安謂此者

○增子鳥

○藏器拾遺曰突厥雀狀如雀而

身赤○時珍本草曰突厥雀郭璞云鶉鴉生北方沙漠
地大如鳩形似雌雉氣脚無後趾歧尾為鳥愍急群飛張
華云鶉生關西飛則雌前雄後隨其行止莊周曰青鶉愛
其子而忘其母○順和名曰鶉 和名多 ○和名之雀擇り小
く鶉のたゞし尾を後赤く首を背脊に物忘れぬ鳥なり
和名をたゞしと云候は鶉と云ふ事とすも此雀やのみ身赤く亦
くは鶉の如し似しは鶉をさすも信りありとすは鶉の如

也

夫木時多し枝の如しゆりて枝も多し照りて水

○猼良安曰猿子鳥狀大如雀全體灰黑胸腹淡赤色羽
灰黑色而有黑彪尾下兩端白者二其嘴短而赤黑脚黑
頂灰黑自頭至胸淡赤而有白圈如千葉菊花紋鳴聲如
曰比字々々々々囀則曰比字知由留々々々々々 猿麻志
古狀似猿子鳥而無菊花紋 照麻志古狀同猿子鳥而
自頰至背正紅 大麻志古狀色同猿子鳥而大其菊花
紋亦鮮明 凡猿子之屬性點利而聲亦喧宛然似猿之
子故名之蓋麻志者猿猴之異名也

○頰白

○三才口會曰畫眉似鶯而小黃

黑色其眉如畫故曰畫眉項於作聲如百舌○歐陽公畫
眉鳥詩曰百轉千聲隨意移山蒼紅紫樹高低始知鑿向
金籠聽不及園林白在啼○古如畫眉白畫眉多々中

羽毛紅褐色之眉乃不向氣中一今信川一りと訓了ら此之○按
 信之類白をさし雀を胸赤褐色之似雀眼下有紅白然方り手巧
 所多野鳥を採るるも信了らと稱し人々中々の畫眉有めい
 わねもそ亦月作也 ○補良安日畫眉鳥俗云頰白鳥也
 狀大於鶯 但中華鶯甚大故三 灰赤色眉白如畫頰亦白
 間黑背上有黑斑翅尾畧黑尾兩端有白毛腹微赤黃色
 臆下有赤斑其脚赤黑其声閑滑多囀中有如小鈴之音
 者人畜籠中弄之其声如白知里々者名斤鈴如日知里
 々古呂々知里々者名諸鈴而以為珍 深山頰白狀似
 畫眉鳥而頭黑胸腹灰白臆下有黑圈彪兩羽亦有黑點
 其尾兩端白囀時起毛冠其裏正黃而美

○月白

○大如也月白乃月之體也 故清眼と名月子相を後
 去體のと似り是も海鳥之類をとり按てて同類と押合ふ

○補良安日眼白鳥小鳥也狀大似鶻鶻頭背翅尾黃青
 鮮明俗謂淡萌黃色是也眼肥有白圈胸臆白而帶柳色
 腹白性能成群好友有樊中亦集一椽相依互推其中一
 雙飛出拔群則餘又相推又自中拔去而如初終為兩隻
 皆飛尽復群集他技故俚語稱人之群居相並如目白之
 推是也每好柳故捕之以囚或用熟柳安干換傍畜之以
 柳研餅汝糖其鳴声日豆伊々々囀如日比伊豆留共雌
 者稍小胸白不帶柳色寂不能囀也

○柳鳥

○漢名未知 ○大如也日柳鳥を
 如鶻似雀者類似り群鳥を干味佳之極刺し不向 ○按此
 鳥中め事秋と訓し柳の事を群し心好むる法不雅なる活
 少而實の處の程にて味佳之極信秋と入てて柳鳥也
 是と考察す也 ○補良安日柳鳥形如小鳩而項白背灰
 黑背下黑白層々眉淡黃頰以下至腹俱白翮上灰黑有

斑翅本微白羽黑白交嘴黃色鼻邊帶微黑脚脰黃其声似鴨而喧好成群味亦似鴨而佳集堂塔好食掠及川棟子小掠鳥狀相似而小頭眉腹共灰白色其餘黑光沢

○^{ヒツ}鵞

漢名未知 ○^{ヒツ}柳多張曰鳥之

此如... 背有黑斑翅蒼黑而交黃腹白声亦同鶺山中水畔有之故名之肉微甘不苦

○^{ヒツ}鶺鴒

漢名未知 ○^{ヒツ}此如...

後... 腹白嘴脚尾俱蒼色共声曰滑清轉如曰知与豆比々々々々畜之篋中弄之

○^{ヒツ}山陸鳥

漢名未知 ○^{ヒツ}...

...

...

○^{ヒツ}柳良安曰山雀狀似畫眉鳥而頭黃白帶赤色眼頷邊有黑條背灰色色嘴胃翅尾共黑腹淡赤性思巧能轉常鳴如曰豆伊々々好食胡桃飽則覆胡桃飢則翫之啄中肉作紙捲輪設篋中則能飞潛其輪別安小箱於篋隅為宿處乃至暮自入每攫物也有鷹鷹之勢其屬小雀四十雀火雀皆亦然矣共其肉味不佳故人不取食又不入藥

用止畜禁中為兒女之弄戲耳

○小雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰小雀似之

○小雀狀似山雀而小故倍呼曰小雀頭黑頸頰白如

○四十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰四十雀似之

○四十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰四十雀似之

○四十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰四十雀似之

△五十雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○五十雀 細雀

○漢名未知 ○大如鳥名曰五十雀似之

○鶡

○順和名曰唐韻曰鶡和名加雀

○鶡小鳥也 ○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

○大如鳥名曰鶡保登志波加也久波

冬無鶉則始出蝦蟇海魚所化終即自卵生故有斑而四
時常有雉鶉与鴛為兩物明矣○食鑑曰鶉狀似鶉而小
蒼黑者有黑斑腹灰白翅黑脚細而高人未食之故捕者
女矣

○頰赤

○大和書曰頰赤ハチノ一種也頰赤ハチノ
皆經ハチノ尾ハチノ之ハチノ方ハチノ也ハチノ文ハチノ之ハチノ志ハチノ也ハチノ其ハチノ性ハチノ極ハチノ速ハチノ所ハチノ載ハチノ為ハチノ雀ハチノ也ハチノ
○一親曰頰赤ハチノ山ハチノ陰ハチノ之ハチノ物ハチノ也ハチノ
○減ハチノ之ハチノ之ハチノ得ハチノ○榘良安曰頰赤形似雀而背色亦如雀其頰
赤胸白有嶋鶉文声似音頰而細高常棲蒿間為原會之
屬

○櫻鳥

○大和書曰ハチノ櫻鳥ハチノ鳥ハチノ也ハチノ其ハチノ性ハチノ極ハチノ速ハチノ所ハチノ載ハチノ為ハチノ雀ハチノ也ハチノ
○榘良安曰榘鳥好棲榘樹故名又名懸巢鳥形小ハチノ食ハチノ鑑ハチノ
依ハチノ太ハチノ

於鳩頭背腹共灰赤色眼边有白色翮灰黑其小羽有青
黄斑啄二寸許有稜黑色脛亦黑能鳴為諸鳥之声又為
人言ハチノ聞ハチノ唱ハチノ名ハチノ僧ハチノ或ハチノ銜ハチノ人ハチノ性ハチノ躁ハチノ惡ハチノ聲ハチノ小ハチノ鳥ハチノ食ハチノ之ハチノ故ハチノ人ハチノ養ハチノ之ハチノ不ハチノ
用ハチノ魚ハチノ鳥ハチノ之ハチノ肉ハチノ餌ハチノ則ハチノ易ハチノ死ハチノ今ハチノ商ハチノ家ハチノ除ハチノ夜ハチノ元ハチノ旦ハチノ灸ハチノ食ハチノ以ハチノ祝ハチノ借ハチノ而
取ハチノ之ハチノ美ハチノ矣ハチノ肉ハチノ味ハチノ未ハチノ異ハチノ

○鶉

○大和書曰ハチノ鶉ハチノ鳥ハチノ也ハチノ其ハチノ性ハチノ極ハチノ速ハチノ所ハチノ載ハチノ為ハチノ雀ハチノ也ハチノ
本朝食鑑曰凡杜鵑上樹啼時其樹边必有無声杜鵑此
則與食鳥也ハチノ山ハチノ陰ハチノ之ハチノ物ハチノ也ハチノ其ハチノ性ハチノ極ハチノ速ハチノ所ハチノ載ハチノ為ハチノ雀ハチノ也ハチノ
○榘良安曰
與食鳥狀似杜鵑而頭背灰黑色胃腹黄赤色翅羽尾皆
灰黑色而有柳色斑口中黄而無声掌指与杜鵑同蓋消
少納言曰鶉至夏秋之末无声鳴時名之與食云云此說
非也似鶉而多似杜鵑○大和書曰ハチノ鶉ハチノ鳥ハチノ也ハチノ其ハチノ性ハチノ極ハチノ速ハチノ所ハチノ載ハチノ為ハチノ雀ハチノ也ハチノ
○榘良安曰ハチノ鶉ハチノ鳥ハチノ也ハチノ其ハチノ性ハチノ極ハチノ速ハチノ所ハチノ載ハチノ為ハチノ雀ハチノ也ハチノ

○鹿

○拾物論曰鹿性多驚烈能別良草他獸多屬十二辰八卦惟鹿不然一千年為蒼鹿又百年化為白鹿又五百年為玄鹿鹿有麋有麂有麇有麀麀一角似麋牛尾麀大麀旄毛狗足麀即麀也麀冬至角解鹿夏至角解鹿又鹿之大者也 時珍本草曰鹿字篆文象其頭角身足之形尔雅云鹿牡曰麇音加牡曰麀音攸一名斑麀按乾寧記云鹿与遊童相戲必生異角則鹿得稱童或以此与梵書謂之密利迦羅鹿山林中有之馬身羊尾頭側而長高脚而行速牡者有角大如小馬黃身白斑俗稱馬鹿牡者無角小而無斑毛雜黃白色俗稱麀鹿孕六月而生子鹿性淫一牡常交數牝謂之聚麀性喜食電能別良草食則相呼行則同旅居則環角外向以防守臥則口朝尾間以通督脉埤雅曰鹿乃仙獸自能藥性六十年必懷璫于角下斑痕

○詩經掛曰呦呦鹿鳴食野之苹

紫色行則有派不復急走故曰鹿戴玉而角斑魚懷珠鱗

紫○順和名曰鹿和名余雅牡鹿曰麀音家日本紀私記

麀音憂和麀名加麀音迷和ハチノ鹿曰伊鹿音加ハチノ鹿曰伊鹿音加

鹿日○和訓多解云云鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

善白牡鹿音加七月の事音加八月の事音加

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日鹿日

昔少時の正統を今の介の鹿也

古今その時々の秋の鹿を捕きて張り人をして見る人 注し

△ 鹿

○ 鹿の鹿云々 鹿の部

○ 鹿の鹿云々 鹿の部

○ 鹿の鹿云々 鹿の部

○ 鹿の鹿云々 鹿の部

△ 鹿

○ 鹿の鹿云々 鹿の部

○ 鹿の鹿云々 鹿の部

○ 鹿の鹿云々 鹿の部

△ 鹿

鹿の鹿云々 鹿の部

鹿の鹿云々 鹿の部

○ 鹿食鑑曰 牡鹿者黄質白斑胸腹微白尾端亦白背上

有一道黑色牡鹿者无角无斑而小也牡鹿常嗅北而鳴

入秋取頻故哥人以秋薄紅葉為伍以作閑寂之嘆也鹿

常食生草就中喜穀蔬穿田園為荒場於是獵夫作笛声而聚牡鹿其笛以鹿角根及鹿胎皮而造或以蝦蟇皮為勝然吹之動地蟻多聚故近世用鹿胎皮而代之其声作牡鹿之微音而北鹿慕來竟罹罟墜陷復不免于砲之難或曰牡鹿至誤為牡鹿之声凡獵夫吹笛自山上至山下則鹿至若吹曠野林間則不至吹笛之人女不動身則忽至于眼前若女動身則去其來時必匍匐而至雖林中草間絕無声而至人以為奇矣

○ 溢散

○ 其如信乃ひりれりれ割肉云

○ 鹿入穴

○ 月令曰仲秋之月雷始收声蟄

夷坏户注坏益其蟄穴之户使通明處稍小至寒甚乃墮

塞之○山海經曰地蟄以冬又以春夏為晝以秋冬為夜

○ 和信八月の雷声入と稱 注し

正位と云

○鮓の 才善属文而縦任不拘時人號為江東步兵既入洛齊王
 同辟為大司馬東曹掾翰因見秋風起乃思吳中菰菜蓴
 羹鮓魚鱸曰人生貴得適志何能羈官數千里以要名爵
 遂舍駕而飯 ○時珍本草曰鮓黑色曰鮓此魚白質黑章
 故名淞人名四腮魚出吳中淞江尤盛四五月方出長槿
 數寸狀微似鱗而色白有黑點巨口細鱗有四腮揚誠齋

詩頗尺其狀云鮓出鮓卿芦葉前垂虹亭下不論錢買來
 玉尺如何短鑄出銀拔直是曰白質黑章三四點細鱗巨
 口一雙鮮春風已有真風味想得秋風更迥然南群記云
 吳人獻松江鮓膾於隋煬帝之曰金齏玉鱠東南佳味也
 ○順和名曰鮓和名須 ○鮓和名須 ○鮓和名須 ○鮓和名須
 馬輝けり也 ○鮓和名須 ○鮓和名須 ○鮓和名須
 名之曰人出之也 ○鮓和名須 ○鮓和名須 ○鮓和名須
 秋鮓多しせのこを鮓和名須 ○鮓和名須 ○鮓和名須
 あり ○鮓和名須 ○鮓和名須 ○鮓和名須
 手書多し買合えわ由りてり別れりてり
 秋鮓多しせのこを鮓和名須 ○鮓和名須 ○鮓和名須
 万五 荒核乃藤江之浦不餘歩即路者將人旅去吾平 柳之尻
 あり 秋風多しせのこを鮓和名須 ○鮓和名須 ○鮓和名須
 ○鮓和名須 日中華淞人名四腮魚本朝廬魚亦四腮魚也

小曰鱖訓世比古源順和名曰鱖音枯婢妾也漢語抄曰世比古今訛婢妾謂妾婢也然則今世訛世比訓世比古以名小鯽乎 鯽魚川河者味美脂多江海者味淺脂少今洛之浞宇治為上品播紀勢尾參遠駿豆總江都房總等州寂盛洛西北海亦雖有之不及東南之美也但雲州松江多出味亦稱美松江之名據吳之松江以号之耶古事本紀謂天孫降臨之時事代至於出雲國小濱造天之御舍天御饗時擲八玉馱口大尾翼鯽獻天之真魚咋也註訓鯽曰須受歧然則雲州產鯽魚者尚矣平清盛自伊勢安濃津乘船詣于熊野祠時中流鯽魚躍入于船清盛喜曰昔白魚入于武王舟遂克高保周而手自調食其餘悉饗于士族世以為美談又東鑑謂大庭景能新造御亭獻盃酒于武衛其儀不極美唯以鯽為五種之肴而薦之今時亦自公候至士民大饗嘉儀家所佳賞也

○宋馬氏開寶本草曰鯽居衛一

名屬魚一名石柱魚昔有仙人劉馮常食石柱魚柱鯽同音當即是此 ○時珍本草曰鯽居也其體不能屈曲如僵蹶也屬鱗也其紋斑如織網也生江湖中扁形洞腹大口細鱗有黑斑米斑色明者為雄相晦者為雌背有鬚鬚刺人厚皮緊肉冬中無細刺有肚能嚼亦啖小魚夏日居石穴冬月偎泥罾魚之沉下者也小者味佳至三五斤者不羨李延飛延壽書云鯽鬚刺凡十二以應十二月誤輒害人惟撮攬核磨水可解蓋魚畏撮攬故也 ○三才口會曰鯽渾者以索貫一雄置之谿畔群來鬻曳之不捨掣而取之 ○順和名曰雀禹食經云鯽折音及和名佐介今其子似菴音茂今按菴也赤光一名年魚春生年中死故名之 ○又曰鯽魚音和何名漢語抄 ○焦氏筆乘曰張志和詩桃花流水鯽魚肥鯽音愧尔雅翼曰凡牛羊之屬有肚故能嚼唯

魚有青鯢白鯢二色白者味勝○順和名曰鯢和名阿米揚氏漢語

抄云水鯢一云江鯢今案本文未鯢○按亦名曰鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

○造鯢亦橋鯢○順和名曰鯢和名安由漢語抄

鯢魚紀細本崔禹錫食經曰春生夏長秋哀冬死○雨航雜

錄曰香魚鱗細不腥春初生月長一寸至冬月長盈赴潮

際生子生已輒稿一名記月魚○上上は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

○太刀魚時珍本草曰鯢魚生江湘中

形如剗物裂蔑之刀故有鯢刀鯢魚之名常以三月始出

狀狹而長薄如割木斤亦如長薄尖刀形細鱗白色吻土

有二硬鬚腮下有長鬚如麥芒腹下有硬角刺快利若刀

腹後進尾有短鬚肉中多細刺煎炙或作鯢鱠食皆美○

多識篇曰鯢今梅多○古古鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は鯢鯢字の字は

吻腮及臍下硬鬣者如木草之說刮去白脂而可熬可灸
其肉白脆味美也小骨橫干背如篋櫛

○鰻鱺

○時珍本草曰鰻鱺魚舊注音按

許慎說文云与鱧同趙辟公雜錄亦云此魚有雄無雌以
影漫於鱧魚則其子皆附干鱧鬣而生故謂之鰻鱺与詭
說合其形如蛇背有肉鬣連尾無鱗有舌腹白大者長數
尺脂膏尤多背有黃脉者名金絲鰻鱺此魚善寄深穴非
若蛟蜃之攻岸或云鮎鮎同鮎亦產鰻或云鰻与蛇通○順和
名曰文字集畧云鱧知名無○又曰鰻鱺魚和名波之
加美伊乎

和州魚解曰しるふといふは魚の性を記すの語也○古本
魚曰鰻鱺、河魚の中にして名一入門曰鰻鱺魚は其魚を以て
の事入り日何の事也云云因圖て其魚を以て鰻鱺魚と云ふ
重なり名可合さる死すしと云はる日何の事也○古本の
物のはり下はるる魚を以て鰻鱺魚と云ふ事あり

河魚の中にして名一入門曰鰻鱺魚は其魚を以て
の事入り日何の事也云云因圖て其魚を以て鰻鱺魚と云ふ
重なり名可合さる死すしと云はる日何の事也○古本の
物のはり下はるる魚を以て鰻鱺魚と云ふ事あり

○小鰻鱺

○順和名曰漢語抄云鰻鱺伊和之
今按本

○閩唇曰鰻似馬噉魚而小有鱗大者數寸○和州
鰻鱺曰しるふといふは魚の性を記すの語也○古本の
物のはり下はるる魚を以て鰻鱺魚と云ふ事あり

干鮓も亦姑く是鮓の干る者也... 鮓亦似鱈而小... 磯至時波赤如血此謂鮓之鼻赤有先故也... 日鮓頭有雁味是也若常別之水戸与別之字和島肥之松浦並貢獻于官府延喜式神祇有鮓汁至許有乾鮓之鮓... 鮓と鱈魚

△鮓と鱈魚
 ○順和名曰陶隱居本草注鱈魚今鱈魚也四声字苑云鯢音題漢語故云小鮓魚黑而灰味也○字彙曰鯢音地鮓别名○又曰鯢音鱸魚鱈也○

鮓と鱈魚の干る者也... 鮓亦似鱈而小... 磯至時波赤如血此謂鮓之鼻赤有先故也... 日鮓頭有雁味是也若常別之水戸与別之字和島肥之松浦並貢獻于官府延喜式神祇有鮓汁至許有乾鮓之鮓... 鮓... 鮓と鱈魚

鮓と鱈魚の干る者也... 鮓亦似鱈而小... 磯至時波赤如血此謂鮓之鼻赤有先故也... 日鮓頭有雁味是也若常別之水戸与別之字和島肥之松浦並貢獻于官府延喜式神祇有鮓汁至許有乾鮓之鮓... 鮓... 鮓と鱈魚

鮓と鱈魚の干る者也... 鮓亦似鱈而小... 磯至時波赤如血此謂鮓之鼻赤有先故也... 日鮓頭有雁味是也若常別之水戸与別之字和島肥之松浦並貢獻于官府延喜式神祇有鮓汁至許有乾鮓之鮓... 鮓... 鮓と鱈魚

亦獻醜傳危之嘉者或以為茗酒小倉之具焉

○河麻

○七如也白石質の一種長二字有切又

其形状似河麻而小常在山谷至五月随水流落其石亦如而
响于声滑亮而可也土人謂之河麻其味香而辛無毒補脾開
胃之又杜若もそのころも扱味也石の石も河麻と云ふり

○按寫信後のころそまよひ似て思ふに斑と云ふるも好まざる書

可く痛く是有馬能勝の青陽山川に多し其れを以て限り傳
或云鼻筋を海の桂葉川といふ河麻は皆一服有りて皆毒雖金種を好
多海草をよたの眼を射りて世傳の川といふ目を治り好く
石をよたの石の石或云は初物津の吊籠地則ち石川の石を云

法國料理の玉葉 ○補食鑑曰形類小鯰而微小腹下

黃白背上青黑帶黃腮下有二橫骨兩鬚極細群游作声
如蛙蚓之吟歌人詠之以為山川閑寂之賞也賀越之俗
賞之嗜食作鯨号地鯨作背号瀬越俱守令戲之予性年

使二荒山旋大谷川之湍觀小魚之泳土人曰加志加奥

也然未聞其声尔或曰有声之奥必使眼眶以開閣此亦

一奇也 鯢音皮与鮠同 俗云岐々鮠 生于溪澗田水聞狀類加志加

奥而有鬚背淡黑帶黃赤頭大口潤其尾有小歧背上鬚
刺螫人大者及天有聲如蛙鳴俚語曰吾喜吾喜人捕之
則哀声甚悲又俚語曰岐々肉味不及鯛鮓尚野人之食

也加志加者素本草也
謂黃頰鮠之奥也

○木犀

開花無實此本犀也 ○蕪頌曰經曰桂其葉甚香 ○時珍本草曰按范成大桂海志云凡本葉心皆一縱理桂有雨道如圭形故字從圭陸佃埤雅云桂猶圭也宜導百藥為之先聘通使如執圭之使也爾雅謂之棫者能侵害他木也故呂氏春秋云佳枝之下無雜木 桂有數種其葉有無鋸齒如卮子葉而光潔者叢生巖嶺間謂之巖桂俗呼為木犀其花有白者名銀桂黃者名金桂紅者名丹桂有秋花者春花者四季花者逐月花者 ○江湖集東陽注云木犀者或云始自天降于靈隱寺之山秋到其香遠聞人未知是何花時有二人稱李木李犀者到云是天上桂也其露落此地為種而生耳二人乃天人也 ○晉書曰卻詵拳賢能射策為天下第一武帝問卿才何如詵曰猶桂林一枝崑山片玉 ○陳元老及第詩云桃花先透三層

○南方草木狀曰江南桂八九月

浪月桂高攀等一枝 ○順和名曰楓 和名并桂 和名良豆 加豆良

國傳曰桂送集 今桂月之桂也 桂之風也 桂之風也 桂之風也 桂之風也

桂之種也 桂之種也 桂之種也 桂之種也 桂之種也 桂之種也 桂之種也 桂之種也

有而今也 有而今也 有而今也 有而今也 有而今也 有而今也 有而今也 有而今也

批把系而粗 批把系而粗 批把系而粗 批把系而粗 批把系而粗 批把系而粗 批把系而粗 批把系而粗

乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之 乃之

華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之 華之

楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之 楓之

乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也 乃百也

万中他石名常日午師物半翼砂也之夢守寸吾意可聞 大伴壺而女

○補良安曰木芙蓉其樹葉蒼實皆似木槿而艷養大七月開花桃紅色或純白或紅白相半有單弁有千弁皆朝開暮萎每枝數乃更開遂日盛其花落為實亦如木槿輕盆有薄皮裏細子大如蕎麥冬葉盡落而實壳尚不零拒霜之名美楸此乎自裂子墮處能生插枝亦易活然本草所謂花耐寒不落不結實之未審

○漆

○韓保昇蜀本草曰漆樹高二三丈餘皮白葉似椿花似槐其子似牛李子木心黃六月七日刻取滋汁 時珍本艸曰許慎說文曰漆本作漆木汁可以繫物其字象水滴而下之形也○事物紀原曰韓子曰舜作食器黑漆其上禹作祭器黑漆其外朱畫其內唐太宗曰舜作漆器而諫者十七人則器之布漆自舜始也○和州多解之術

于漆けきるを漆と書し神の苦痛より始りたり

○棗

朔傳曰上林獻棗漢武以杖擊殿檻呼方朔曰叱々朔來此篋中何物朔曰上林之棗四十九枚上曰何以知之曰呼朔者上也以杖擊檻者兩木也朔來々々棗也叱々四十九也上大咲○法苑聚林曰如正法念經說切利天已下薄福諸天以患飢故下來至此閻浮人中摘棗而食○蘇頌口經曰棗按郭王註爾雅云壺棗大而銳猶壺瓠世也木少而實酢還味稔棗也其味短蹶泄苦棗也其味苦哲無實棗也○時珍本草曰按陸佃埤雅云大曰棗小曰棘々酸棗也棗性高故重束棘性低故並束々音次棗棘皆有刺鉞會意也其類甚繁○順和名曰棗和名奈豆女○和

和辭曰如月見と能事皆多草と云はば枯草芽と云はぬ○古
今老圃集曰貞信の書を世にのびる或那の秋の夜より書
のやむらうそ中をかりて枝をこれくありて一箇の山の溪の山乃
野の露の書すのたより極のひらりそよりして千もたるとよ中を
いふなり○和辭の程程もつ後なり

古今和歌あらはしむるにありてはとほほあひの分り身とてよあは
万去 成事寸二東國延日萬乃後先將相跡をい候 作者未詳

○榎良安曰東出於撰州池田者良

○和歌

○御筆同和歌いそむと世道の事とあるま
之下と和歌の心み野を中なり物と我れ形よ世ある人と云申考の形
み秋の形もいそむと物と心してま秋の心あはし ○今和歌の形
と何連ふ形式もいそむと筆もあつたの降と好むの流傳と物も
連ふと考りあり ○連歌集を撰曰和歌形も物の形と云はり

和歌といふも和歌の心なりと云はる秋 ○毛徳重曰 連歌の
中和歌 和歌

○和歌の心なりと云はり

△字法和歌

○藤原集曰字法和歌いそむ ○師範曰和

和歌の心なりと云はるも古人多くいふとてありとありと字法の和歌とい
先秋の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも

○今和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも
あは 青いん 人の海を渡る人 廿と云はるの秋の心なり

△和歌

○御筆曰和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも

和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも
乃今案二句の物なりと云はるも和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも
下も三句なりと云はるも和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも
山車揺揺然騰るも和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも

△和歌

○周礼曰薙氏秋繩而莢之 注草

合實曰繩莢其繩則實不成 ○和歌の心なりと云はるも和歌の心なりと云はるも

く世といふも平葉の枯る多ふ所を其根を枯れ海より其の
實より其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は
切置
○毛吹系曰辨 花體 ○今抄に其根
の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置
何と枯れ海より其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置

○陶弘景本草曰凡採葉時月皆
是建寅歲首則從漢太初後所記也其根物多以二月八
月採者謂春初津潤始萌未花枝葉勢力淳濃也至秋枝
葉乾枯津潤既流干下也大抵春寧宜早秋寧宜晚 ○か
や此後考ふも其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置

△胡黃連
枯草根頭似鳥嘴折之内似鸚鵡眼者良 ○古抄に其根は相黃
連と黃連と云て大也其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置
て其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置
そを好く用く 其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置
連と云て其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置
山本中より其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置
そを好く用く 其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置
○其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置
○其根を採るは此の如くは秋に採りて後ハ熟す故に其根は切置

△苦參引
五七寸許兩指粗細三五莖並生苗高三四尺以來碎青
○蕪頌口經曰苦參其根黃色長
形似桔梗花而小色黃有魚花者根細長黃色
故令禁祢胡黃連當藥播州三木郡多有之苗高五六寸
一根數莖其莖細而淡紫色葉似地膚草而小七月開花
一形似桔梗花而小色黃有魚花者根細長黃色

色極似槐葉春生冬凋其花黃白色七月結實如小豆子
 ○本草別錄曰苦參生汝南山谷及田野三月八月十月
 采其根○時珍本草曰苦以味名參以功名○順和名曰
 苦參和名比里久佐○和名比里久佐○和名比里久佐
 場和名比里久佐

○嶽良安曰苦參形狀和漢曰而丹波之產最良淡州豫
 州今治藝品廣嶋次之帶黑色者不可

○牡丹分根

○蕨頌口經曰牡丹欲其花之詭
 異皆秋冬移接培以壤土至春盛開其狀百變○遵生八
 牋曰牡丹栽宜八月社日前秋分後二三日○韻府曰韓
 湘能染蒼根最之白牡丹獻其根下置藥明年金枝碧色
 四面開五色花○和名牡丹○和名牡丹○和名牡丹
或名接移○或名接移○或名接移

十下十活...
 分の芽と接し...
 今の牡丹を種根を

△芍薬分根

○本草集日芍薬乃欲其苍葉肥
 大必加糞壤每歲八九月取根分削○遵生八牋曰芍薬
 八月起根戴土澆入糞三年一度可分○月令廣義曰十
 二月可移芍薬○和名芍薬○和名芍薬○和名芍薬
此花は根ありと云ふ人甚多流よき今抄れい根をとりて切
とすの好む人甚多

○薔乃心

○時珍本艸曰薔冠以卷狀金名
 三月生苗入笈高者五六尺短者終數寸其葉青柔頗似
 白苧葉而窄觚者赤脉其莖赤色或凹或扁有節起六七
 月稍回卷有紅白黃三色其穗曰長而尖者儼如青箱
 之穗扁卷而平者儼如雄雞之冠卷大有團一二尺者層
 々卷出可愛子在穗中黑細光滑与苧實一樣其穗如枇

麥狀蒼最耐久霜後始焦○山谷詩曰紫冠黃鈿細絲窠

○王錫爵詩曰駸司德凡夜名品濫衣剗中一鳴猶不易

五德亮應難○和名生後の... 揚子江の... 揚子江の...

補畫譜曰有掃帚雞冠有扇面雞冠有紫白同蒂名三色

雞冠扇面者以... 為佳帚樣者以高為最然下字時撒高

則高撒低則低也若三色雞冠一朵同蒂色分紫白粉紅

亦奇種也俱收子種○良安曰雞冠者數種縵雞頭花縮

如紅線縵雞總五寸卷大

○雁來紅時珍本草曰雁來紅莖葉穗

子並與雞冠同其葉九月鮮紅望之如卷故名吳人呼為

老少年一種六月葉紅者名十樣錦○三才口會曰古詩

曰翔雁南來塞草秋未霜紅葉已先愁綠珠宴罷飯全谷

七尺珊瑚夜不收○法少細... 柑... 柑...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

世多也... 但此の... 中の... 草花... 俗名...

○鴨跖草

時珍本草曰鴨跖草花謂碧蟬

蒼三四月生苗紫莖竹葉嫩時可食四五月開花如蝶形

兩葉如翅碧色可愛巧匠採其花取汁作畫色青碧如黛

也○順和名曰鴨跖草揚氏漢語抄云和名都岐久佐

○本草名曰鴨跖草

○本草名曰鴨跖草

○本草名曰鴨跖草

○本草名曰鴨跖草

○本草名曰鴨跖草

○本草名曰鴨跖草

○本草名曰鴨跖草

○本草名曰鴨跖草

萬十 朝露... 日斜共可消所念

日醉... 又孃者殿乃後之百... 日斜共可消所念

夫本... 乃後之百... 日斜共可消所念

○鳳仙卷

時珍本草曰鳳仙花其花頭翅

尾足具翹然翅如鳳狀故以名之女人采其花及葉包染

指甲故有指甲名宋光宗李后諱鳳宮中呼為好女兒花

張宛丘呼菊婢二月下子五月可再種苗高二三尺莖有

紅白二色其大如指中空而腕葉長而尖似桃柳葉而有

鋸齒極間開花或黃或白或紅或紫或碧或雜色亦自愛

易狀如飛禽自夏初至秋盡開謝相續結實累然大如櫻

桃苞中有子如蘿蔔子其性急速故能透骨軟堅庖人烹

魚肉硬者投數粒即易軟爛

○三才口會曰金鳳花俗名

鳳仙花五色雙臺酒金或一本開二色花能解諸毒能墮

胎○多識篇曰鳳仙花

俗曰保祢奴幾又者津未久礼奈伊

○大和歌云白鳳

仙花之為人風花之葉如柳花之咲如紅雲之集也

○羅山詩集曰庭前忽見鳳仙英丹

穴飛移羽化輕唯恠集楓毛色動散為紅葉得芳名

○補畫譜曰金鳳花有六種有重弁單弁紅白粉紅紫色淺紫

如藍有白者上生紅紫凝血俗名酒金六色花開一落即

去其蒂則花茂与月季同

○大和歌云小風吹花風仙花之葉

如多毒葉邪入之毒氣也生之毒體也

○大和歌云小風吹花風仙花之葉

如多毒葉邪入之毒氣也生之毒體也

○大和歌云小風吹花風仙花之葉

如多毒葉邪入之毒氣也生之毒體也

如多毒葉邪入之毒氣也生之毒體也

○駒繫心

○弘景本草曰狼子其牙似獸之

齒牙故有諸名 吳普本草曰狼牙葉青根黃赤六七月

華八月實黑 ○保昇本草曰苗似地苒而厚大深綠色根

黑若獸之牙 ○順和名曰狼牙 和名古末 ○大和歌云

佐全割草也 駒繫心也 今割草の名未詳也 八月の秋

ま未 女房いぢり草の駒繫心は 八月の秋

○榘良安曰狼牙山野所々有之高一二尺莖枝葉蒼並

似荻而小七月開花作莢如小豆夾中子黑色其根甚強

故蜀人可繫牛馬俗呼名駒繫

○紅蕉

○時珍本草曰芭蕉曰一種紅蕉

葉類芦葉蒼色正紅如榴花日折一兩葉其端有一點鮮

綠可愛春開至秋莖猶芳俗名美人蕉 ○白樂天東亭閑

坐詩曰錄樹為佳客紅蕉富養人 ○大和歌云

あはれ蕉花よりあはれをさす内あはれをさす蕉花

あはれ蕉花よりあはれをさす内あはれをさす蕉花

川南の向原に土に埋上りて生ずる温く小陽の在るを
或は襖を掩定風を之觸る月温く生て堪り可憐又宜と可耐
今好聲を多し去芽生也(秋に生て紅葉を多し西條也)蕉の類なり
秋に生て紅葉を多し去芽生也(秋に生て紅葉を多し西條也)蕉の類なり

○檀特花

○時珍本草綱一種紅者如火炬

謂之紅蕉有實○谷響集曰容又曰有俗名檀特花者花

如炬火此亦芭蕉之類耶答曰是亦芭蕉之別種矣引注

本 葇圃回春日曇花花紅子堪串珠微香○大和郡白檀

特花亦芭蕉の類なり恰似芭蕉少くも長て人好む月抽莖生

事はあらず或は之を人許解ゆと事なりなりといふ蓋は好む

連り實も此也不全葉能たて法事地なりは宜形葉身よりく

大和指指也(被田付子也)肉細み水曰曇花と檀特花也

○榎良安日檀特草高三四尺葉似芭蕉而小不甚柔又

似蒼苳以大不甚硬長尺余闊三四寸冬枯春生七月抽

莖開卷深赤色形如穗實可愛結子圓黑色甚硬用作念

珠本西南外国之草性寂畏寒如植霜雪則失種故防北

向南之地可種冬則覆稭或稻藁等以禦寒濕其子為念

○刈萱

○漢名未詳○今馬場曰刈萱は

ともいふなり○御筆曰く刈萱は花と花と也○大和郡白檀

草は萱草節穂皆草のこけりて少くも密なりを南をく草は次

葉もこの類多し海にても亦あり通しは月種をく中華の書

ゆへ新事りて草葉の類なりと云ふ○拙者小字は花の草と云

のなり也御筆の流布も亦花のなり也但今俗に刈萱は花

を草類を色じ其なりて少くも密なりて秋も生て種を多し

種も獨りて生て少くも密なりて秋も生て種を多し

是を刈萱と云ふ也刈萱の種は鳥信の流布も亦花の

種も獨りて生て少くも密なりて秋も生て種を多し

種も獨りて生て少くも密なりて秋も生て種を多し

種も獨りて生て少くも密なりて秋も生て種を多し

○菅草 茅之類也

○時珍本草曰白茅葉如茅故謂

之茅易曰拔茅連茹云云夏生白花茸々然至秋而枯

順和名曰茅和名萱和名○連茹秋或曰萱草也 御筆曰萱

之草萱草類也和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

毛去切和名○秋秋和名○秋秋和名○秋秋和名

核はくはるゝるあのみさるゝ水葱は番の二物に核核の核ありとも
まの核核をこころとて細切す ○ 榎良安日沢桔梗 俗高近二
尺葉似山丹草葉而短三四月葉間開花形似桔梗而小
紫色頗似水葵蒼而淺水中亦生多生湿地 ○ 此花は三月
開花とてそのや今冬よの初時より中秋まであり

○ 新葉 ○ 和葉日世名の葉あやむる花も
空山人の字より新葉とて信より新葉とて新葉の今も新葉也

東菊 ○ 大和菊日世東菊をよめ新葉腸
大和は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて

○ 今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて
今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて

○ 今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて
今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて

○ 今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて
今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて

○ 今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて
今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて

○ 今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて
今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて

○ 今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて
今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて

○ 今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて
今世は(葉大は信)杜若の葉とて新葉とて新葉とて新葉とて

又似蜀黍苗有淺黑皮裹蘆數片層々夏抽垂開黃苞不
如蘆蘆苞之艷性畏寒移植於京大坂多難茂又以不甚
美人不為珍自古以蘆蘆稱於毛止故是亦呼曰濱於毛
止各誤而已○おる白も純の人おる世も色ぬの字もま青
五好人播て庭園に播る不難書ぬとほく時活を播りて播り
播るも庭に播るを播りて播りて播りて播りて播りて播り
と有書ぬ人らるる道徳後まう白也とて播りて播りて播りて播りて

○車前子

○詩經曰采之菜苒○說文曰苒

苒一日馬駟曰車前實如麥服之令人有子○蕪頌曰經
日車前春初生苗葉布地如匙面累年者長及尺余中抽
數莖作長穗如鼠尾苞甚細密青色微赤結實如苧麻赤
黑色今人五月採苗七月八月採實○時珍本草曰此草
好生道傍及牛馬跡中故有車前名韓詩外傳言直曰車

前瞿曰苒苒恐亦強說也○順和名曰車前子一名苒苒

和名於保波古

○此苒苗或稱之時をいつて次を多り苒苒は月部をり

好實を産く○謝良安曰車前子大葉也出於藝州者良撰州

丹別次之○ある考ふはともす小の種あり小葉の之を多り子種

潤子種大葉の之を多り小葉の之を多り之を多り之を多り

有とありしは小葉考ふも牛馬の跡にまゝ多り車前を多りたり

○瓠

○時珍本草曰古人壺瓠瓠三名

皆可通稱初無分別故孫愐唐韻云瓠音壺又音護瓠臚
韻和名云奈也陶隱居本草作瓠瓠云是瓠類也許慎
說文云瓠瓠也又云瓠瓠也瓠大腹瓠也陸機詩疏云壺
瓠也又云瓠也莊子云有五石之瓠諸書所言其字皆當
與壺同音而後世以長如越瓜首尾如一者為瓠多識篇
字多年私私瓠之一頭有腹長柄者為懸瓠同云豆
字多古也此無柄而四大形扁者為瓠同云布
久倍瓠之有短

柄大腹者為壺私云是壺盧也俗云倍宇多年壺之細腰者為蒲蘆彭識

俗云世各分名色其形狀雖各不同而苗葉皮子性味則

一故茲不復分條焉○又曰長瓠懸瓠壺蘆匏以蒲蘆名

狀不一其實一類各色也但有遲早之殊○乃乃石鏡を

乃乃石鏡を

○時珍本艸曰鼈舌草生南方池

沢湖泊中葉如大葉菘菜及茱萸狀根生水底抽莖出水

開白花多識篇曰鼈舌草今案多豆乃○左如右葉葉

切白葉葉而大也西土の方言も水かろくそ水乾多し葉根は月も

二月也細く

○縷紅

良安三才口會曰留紅草細莖

鞞葉細密如杉菜葉而表裏淺青色莖端出蔓八月枝又抽

短莖開卷形如丁子樣而紅色長六七分可殺蒼罷結角

中有細子○古流のしき著ゆりそ木の根を御事く可く

今也留紅と云ふの家多極し差次

○木賊川

生每根一幹無蒼葉寸々有節色青凌冬不凋四月采之

蘇頌曰時珍本草曰此草付節面糙澀治木骨者用之

采無時○和名抄曰木賊和名度○

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

和名度

弁色立成曰奈伊本朝式云草刈安 ○私創解曰くやもく如伊

李の根云又刈や此の根和信今ノ於て深草のくも七ヶ月刈之扱

毛月也 ○榘良安日多出於越前以為染家必用之物

○苧苧

○詩經鄭曰縞衣苧蘆聊可與娛

注苧蘆可以染絳故以名衣服之色 ○陶氏本草曰苧今

染絳故苧草也詩曰苧蘆在阪者是也 ○保昇本草曰苧

根紫赤色八月采 ○蕪頌日今圃人亦作畦種蒔故史記

云千畝危苧其人與千戶侯等言其利厚也 ○時珍日陶

氏本草日東方有而少不如西方多則西草為苧矣十二

月生苗蔓延數尺方莖中空有筋外有細刺數寸一節每

節五葉面青背綠七八月開花結實 ○順和名曰苧和名阿加

祿和名阿加 祿良安日苧和名阿加 河州石川郡山田苧為上

○木綿採

○揚升菴文集日綿花通鑑梁武

帝木綿皂帳史炤叙文云木綿江南多有是以春二三月

下種既生須一月三華至秋生黃花結實及熟時其皮四

裂其中綻出如綿土人以鍊銀碾去其核取如綿者以竹

為小弓長尺四五寸許牽弦以彈綿令其勻細卷為筒就

車紡之自然抽緒如縑絲狀織以為布按此則今之綿花

也綿有二一日絲綿出干蠶緝一日木綿出干交廣名斑

枝花一日草綿史炤叙文所言形狀是而以解木綿則非

也其日竹為小弓長尺四五寸今之制綿花弓長五六尺

以羊腸為弦彈之聲如晴雷朱以真有弓翔翔歌一首可

證今之綿弓勝于舊矣丘文莊謂綿花元始入中国殆未

考史炤之說也 ○時珍本草日木綿有二種似禾者名古

具似草者名古終梵書謂之淡婆又日迦羅婆却江南淮

北所種木綿四月下種莖弱如蔓高者四五尺葉有三尖

如楓葉入秋開花黃色如葵花而小又有紅紫者結實大

如桃中有白綿々中有子大如梧子亦有紫綿者八月采
 椹謂之綿蒼沉懷遠南越志所謂挂州出古終藤結之如
 鵝毳核如珠珀治出其核紡如絲綿染為斑布者皆指但
 草之木綿也○大和布名曰木綿棉也其色白而細
 文脈の中より細解少を借成す云々云々云々
 〇宋の末始て好を南蠻より傳へ兵燹の時時流況
 〇和布名曰木綿棉也其色白而細
 〇和布名曰木綿棉也其色白而細
 〇和布名曰木綿棉也其色白而細

百三派傳歌 白縫乃種書乃綿者以尔著而未者故称棉暖所見 由は傳
 〇和布名曰木綿棉也其色白而細

〇類聚取国史卷第九十九殊倍部曰桓武天皇延暦十八年
 七月有二人乘小船漂着三河国以布覆背有犢鼻不着
 袴左肩著紺布形似袈裟年可廿身長五尺五分耳長三
 寸餘言語不通不知何国人大唐人等見之僉曰崑崙人
 後頗習中国語自謂天竺人常彈一弦琴歌舞哀楚閱其
 資物有如实者謂之綿種依其願令住川原寺即賣隨身
 物立屋於西擲外路邊令窮人休息焉後遷住近江国分
 寺十九年四月庚辰以流來崑崙人如实綿種賜紀伊淡
 路阿波讚岐伊与土佐及大宰府等諸国植之其法先筋
 陽地沃壤掘之作穴深一寸衆穴相去四尺乃洗種漬之
 令經二宿明日植之每旦淮水常令相決待生芸之○五
 雜組曰卷立文莊謂綿蒼自元始入中国非也棉花雖有
 草木二種縱謂之木綿蒼其實木種者迺斑枝花非棉花
 也唐李商隱詩木綿蒼開鷓鴣飛通鑑梁武帝木綿卓帳

史炤注叙甚詳與今綿花無異但云江南多有之今則燕
 魯燕洛之間盡種之矣豈元時始求種於江南而令北地
 種之耶若謂自虜地入中國則虜地何嘗有棉花漢中行
 說教匈奴得漢緼絮馳荊棘中即裂亦不知種裕之厚也
 况棉花極畏寒赤地若霜早則花皆無收故空閩廣今及
 謂其自北而至可乎○秉燭談倦曰古貝名義集曰劫波
 音注或書劫貝即木綿也正言迦波羅此樹華名也可以
 為布高昌國名種云云是也○程大昌曰劫波之知貝
 といふは劫つて在貝と云古名の字のよき一國と音貝とありは
 漢書云唐張奐傳云古貝名也律書也古貝亦律也○
 之而在古石同置此名耶柳面物也此古貝時珍云古貝の
 名のり人のも之程大昌の云はるに古貝と云

○金花系

烟花一名淡把姑初出海外後傳種漳泉今地隨有之木
 ○清康熙時人陳扶拙著花鏡曰

似春不老而葉大於菜開紫白細花葉老曝乾細切如線
 後美其名曰金絲烟一名返魂烟一名擔不飯人喜其烟
 而吸之雖至醉仆不怨可以去溼散寒辟除瘴氣但久服
 肺焦○漳州府志曰淡芭菰種出東洋近多蔣之者莖皆
 如牡菊而高大花如蒲公英有子如車前子取葉洒酒陰
 乾之細切如絲燃之許置管中吸其煙令人微醉云可辟
 瘴此外夷吐之習閩左少年競效以為豪舉然遂有眩仆
 者姚可成曰返魂草出東夷海嶠諸國夷人采得曝乾
 貨來中國形細如絲今閩廣諸處燒入竹筒滿口便竅穴
 俱遍仍噓出之夷狄之習豈中國之所宜歟○本草洞詮
 曰煙草一名相思草言人食之則時々思想不能離也味
 辛气温有毒蓋空腹食之充然氣盛如飽々後食之則飲
 食快然易消人遂以之代酒茗終日食之而不厭也○羅
 山文集曰四十年來蠻船載來有草葉臺語曰多婆胡刻

其葉火之吸其烟其初崑崙兒之卑賤奴隸之燃帚為管
 包其乾株葉以咽其熏烟漸々効見無貴賤皆用之於是
 打鑰銅如牽牛花形附于竹官頭洞管中節加銅管小口
 于管本以吸之奢者至於以金作管者頃年朝鮮聘使從
 者朴真卿号螺山彼邦之進士也推祿學士余問曰多婆
 胡者菘菘欬答曰近自南方來人皆吸之号曰烟酒欲止
 不能遂以為幣云尔予按譚峭化書云躑躅之酒鳥喙之
 舖菘菘之膏治葛之乳初嗽之若芥再嗽之若黍彼嗽之
 若瓦又嗽之若舖是漸之使然也安錄山与契丹戰雜
 菘菘於飯中而去矣食之乃醉祿山還兵擊契丹以勝此草
 有毒明矣白樂天詩不見菘菘花狂風吹正不落今有栽而
 生花者能耐風然則所云多婆胡果菘菘欬已上羅文
 菘菘苗莖高二三尺葉似地黄王不留行紅藍等而凋如日
 三指四月開花紫色莖莢有白毛五月結實時珍本草
 曰菘菘之功未見如竹說而其毒有甚焉能使痰迷心竅
 蔽其神明以中共視聽故耳唐安祿山誘契丹飲以菘菘

酒醉而
 抗之 ○ 古和事曰今多事如東國竹下和の烟系し又流傳也
 曰和今南系の烟と云漳州福州の芬と云割たことを切若と云烟
 解より南系と云今も後より西域の人暹羅人等の烟葉を喰ひ煙を
 も吸ふ今由係菘菘をたんとて割り煙のり中にも菘菘をたたり
 有延壽或は菘菘を裁りれ目も若り竹葉向也多婆胡の葉類
 と云古反を代和より海の存り中系個月を不裁日也と云て為り
 ると云の初年也或は日交も十年初て山別也藤の割き切らざる
 と云又古語母海を裁初竹筒に入れて火を吸後よま湊の烟月を用法
 元海のれを今も礼の庵より長徳より唐人の管烟系と云菘菘とい
 不害とい不菘菘といふ知 上坪の正統考也和若の若林とい
 て年つを乾く或は布するみ割てきき都ては烟系と稱す菘
 菘の葉形種頭は口徑長三寸口舎の之皆和若の多事也おお
 せりといふ今も朝も多婆胡といふ菘菘をたたり初も菘菘を種
 かん ○ 補食鑑曰煙草素自南蛮国來移種於本邦不

過六七十者此苗叢生類萵苣莖高三四尺葉似南星商
 陸而長大八九月開小花莖類簇々葩厚而淡赤色略似
 不蒜紫苑之類結子如桐實而有稜黃色七八月采葉晒
 乾青變作赤黃褐色而厚為上深赤黑而厚者次之淡赤
 黑者淡赤黃者又其次也薄黃丹青而薄者為下品初著
 船高夫卷葉作簞如筆葉狀吹火夾廣外吸狹外則烟滿
 口欲吞其烟暫住喉中而次出口及鼻孔令胸膈以通利
 令氣以舒暢而得一時之快故長崎商客爭效者如流人
 々吸之不經年月而九州周畿之後番國傳吸管此号幾
 世流此番語未詳名義今諸州多產之拱州服部之產有
 奇香異味為當世第一和州吉野萱村之產亦次之此兩
 品俱競美泉州新田之產亦有佳香亦次之甲州之門前
 小松信州之和田玄古上野州高崎之產不相劣為佳品
 氣寂烈者丹之周山甲之石火箭也常之赤土味重氣濁

而不為佳肥之長寄者雖烟草初起之地其產葉色黃青
 氣柔薄而有臭不足用耳○良安曰烟草天正年中南蛮
 高船始貢此種番椒之種亦始于日時以植於長崎東土山今烟草
 番椒為日用不可欠之物也二月下種五月移栽摘去新
 芽除虫也每旦不可怠七八月采葉覆藁莖莖之一宿取
 出每一葉挾繩如編成而晒乾一夜露宿後晒乾則成黃
 赤色擴皺收之八九月莖頭出朶極開小白花帶赤色畧
 似紫苑花結子內有細子黃褐色有小虫而食其子故能
 不避虫則難得其種和漢烟草同時始矣初出海外後傳
 種於漳州泉州今所々有之大明崇禎十一年令云有私
 販烟酒賣通外夷者不拘多寡梟斬由此觀之則大明季
 人家貴之當本朝寬永矣往古無烟草而莫不足多吸之亦
 不克一掬糧費田圃減穀類故呼曰貪報草元和寬永之
 頃天下令禁種之然不得正竟以立於茶酒之上不嗜者

百中唯二三人耳雖有小毒多嗜者亦無害矣阿蘭陀朝鮮琉球人亦甚南蛮流外科者膏藥中入烟草嫩葉汁用能止痛挑膿止血殺虫凡藍及諸草葉生虫者以烟草莖汁灌之猫犬蛇諸鳥皆惡烟氣独猿見刻烟草則扒食

○蒲萄

○神代卷日一云泉津日挾女追留之故伊弉諾尊拔釵背揮以逃矣因拔黑髮此即化成

蒲萄○樓炭經却初相日地肥不生更生兩枝葡萄其味亦非久久食多夫相形笑○詩經豳風日六月食鬱及

萸注鬱隸屬萸萸也○時珍本草日漢書作蒲桃可以造酒人酹飲之則酌然而醉故有此名漢書云張騫使西

域還始得此種而神農本草已有葡萄則漢前隨西舊有但未入關耳共樹折藤壓之最易生春耳萌苞生葉頗作

拾樓葉而有五尖生鬚延蔓引數十丈三月開小苞成穗黃白色仍連着實呈編珠聚七八月熟有紫白二色三元

延壽書書蒲萄架下不可飲酒恐虫屎傷人○順和名日紫葛和名衣比文選蜀都賦日蒲萄乱漬漢語抄云衣比

○和利解云之の碎之世の醸酒喜有り也○大和守日志

能收之春不取之秋之酒之味之佳也○大和守日志

真之味之佳也○大和守日志

○葡萄酒

○增一經日又生自然地肥味嘗

如葡萄酒○酉陽雜俎日葡萄酒一名馬乳亦名黑水晶固人釀以為酒富人藏酒至千斛千年不敗○蕪頌口經日

按魏文帝詔群臣日蒲桃當夏未涉秋尚有餘暑醉酒宿醒掩露而食其而不飽酸而不酢冷而不寒味長汁多除

煩解湯又釀為酒其干麴蘖善醉而易醒他方之果寧有匹之者乎○時珍日葡萄酒取斗同麴如常釀糯米飯法無

落尾 是葡萄酒の

子一名烏覆和名阿介比○和制名解云あけのこあけのこ也そまふか
とけと通みとのをす○和名也せめ説通系藤のふ燕尾子子の

鬼目子コヨリリヤウ

○藏器本草曰白茨鬼目菜也蔓

生尔雅名苻郭璞云似葛葉有毛子赤色如耳瑠珠○時
珍曰白茨謂其花色鬼目象其子形此俗名排凡子是也
正月生苗秋開小白苍子如菴葵子熟時紫赤色亦嶺南
有木果名鬼目葉似楮子大如鴨子七八月熟黃色味酸
可食○順和名曰白英一名鬼目草和名保魯亦作曾之
一云豆久美乃伊比
稱○古名白英名厚結畫語乃桑也傳言多如紅毛一物之桑
葉手心以てお月を定む之根根より多中子葉もやち根子葉
和名を古名よみ門より傳のり上戸と云○今按やうの
排凡子の重結之類と云ふは順和の語なりと云ふ語也皆
之通す○榘良安曰白英葉似菊葉而柔大深又七月開

小白苍五年抱子鬪外有毛鳥之状其子赤熟時鴨喜啄
之故俗曰鴨上戸亦鴨鴆嗜之故曰鴨鴆飯稻豆久美乃
伊比稱

王瓜カラシブ

○宗奭衍義曰王瓜其殼徑寸長

二寸許上微凹下尖長七八月熟紅赤色殼中子如蠟蚶
子者今人又謂之赤雹子○時珍曰王瓜一名土瓜其根
作土氣其實似瓜也故名土瓜王字不知何義瓜似雹子
熟則色赤鴉喜食之故俗名赤雹老鴉瓜二月生苗其蔓
多鬚其葉圓如馬蹄六七月開五出小黃花成簇結子累
々熟時有紅黃二色○古名曰王瓜其葉鱗々其葉似
とけりそまふと結つる似り好まぬもさる根と水花を粉
有草騷々天如粉と云ふ也○今按詩の蝻風果羸と云ふ瓜
云是括書之月令王瓜也と云ふと種菜今王瓜と云ふ瓜
老鴉瓜の類なり

○葛

○蕪頌曰葛春生苗引藤蔓長一
 二丈紫色葉頗似楸葉而小色青七月着花粉紅色似豌豆
 豆蒼不結實○時珍曰其蔓延長取治可作絺綌其花成
 穗累累相綴紅紫色其莢如小黃豆莢亦有毛其子綠色
 扁如鹽梅子核八九月采之宋蘇頌不結實誤矣○順
 和名曰蕪恭本草注云葛殼一名麻豆和名久順加葛實
 名也葛脰和名久須加葛根入地五六寸名也○和名解
 曰今世所謂葛藤也○今世所謂葛藤也○今世所謂葛藤也
 葛藤之根也○今世所謂葛藤也○今世所謂葛藤也
 又為根也○今世所謂葛藤也○今世所謂葛藤也

萬十

我屋戸之田春日殊色付ぬ不毒者中何物也

仙書傳

○楸良安曰葛蔓長者一二丈其葉較薄微似楮葉而面

青背白至凡則能翻恰如反掌婆娑而作声故哥人稱葛
 葉裏見聲入恨其蔓青黑色有微毛強韌不可截斷本草
 綱目謂紫色者乃枯舊色也葛根出於和州金剛山者良
 丹波次之葛粉吉野瀑葛為最上西國亦多有之春月取
 根搗爛漬水一宿以白塗為上其次灰白色者名布野人
 充食渣如絲瓜皮以代薪凡此物葉及蔓至根共用居多
 大為民利用

○稻

○神代卷曰保食神之腹中生稻

詩經豳曰八月其穫注穫禾之早者可獲也○禹錫食鑑
 曰爾雅曰稌稻郭璞曰別二名也今沛國呼稌周頌云豐
 年多黍禮記云牛宜稌豳凡云十月穫稻皆是一物也孔
 子曰食夫稻周官有稻人漢有稻田使者並通指秬糯而
 言所以後人混稱不知稻即糯也○時珍曰稻稌者秬糯
 之通稱物理論所謂稻者漑種之總稱是也稻從留音函

象人在白止治種之美
○順和名曰稻以名廣志云有紫
芒稻赤穰稻薩珣切韻曰芒稻
禾穗芒也唐韻曰穗和
保禾穀末也○和訓身解曰
稲の穂はこいつの暑稲なる
穀もまれば苗のうまき
いよ稲もこゝれは稲の種をまき

百十水陸天漢水陸草木今風尔鹿平見者時去來良之 抄中凡

水掛草 抄 梅の根の木の秋結て水掛草と名くかたはら

富貴草 抄 あやふくしの向の山向の秋結て富貴草と名く抄中凡

稲の日 夕暮る所の時しての稲の日の影 後集四言

△稲葉

○奥後抄曰く白くても青くても稲葉

のつらさを越えてはけるは稲葉とてはねはまはる 抄の末の乃似
たは道へては稲葉をまきり 稲葉のそとに言はれる稲葉の
さやの葉のそとに言はれる稲葉をまき 田舎のそとに言はれる稲葉の
いよをまきとて稲葉のそとに言はれる稲葉のそとに言はれる稲葉

そとに言はれる稲葉のそとに言はれる稲葉のそとに言はれる稲葉
たは道へては稲葉をまきり 稲葉のそとに言はれる稲葉の
さやの葉のそとに言はれる稲葉をまき 田舎のそとに言はれる稲葉の
いよをまきとて稲葉のそとに言はれる稲葉のそとに言はれる稲葉
○抄
中凡稲葉稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり
あはれにわあまを稲葉をまきり 稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり
もき柳の穂をまきり 稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり
思を言へて言へる稲葉をまきり 稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり
めきを言へる稲葉をまきり 稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり
抄 今平年にもまきり 稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり
秋の田舎の稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり 稲葉の穂をまきり

△籾稻

○宗奭行義曰種以白晚米為最

一早熟米不及也 ○時珍曰粳乃穀稻之總名也 ○順和
名曰杭米 和名字流之祿 ○樓炭經 仏訖世界 曰更生杭米無者
糠糟不加調和備養味無生食之生男女形 ○和州解
田 和州の田 曰果之 和州の田 也 和州の田 曰和州米 和州の田 也 ○今和州米

△糯稻

其性粘可以釀酒可以為粢可以蒸糕可以熬錫可以炒
食其類亦多齋民要術有九格雉木大黃馬首虎皮火色
等名是也 古和州曰中書律第の糯米を以て糯米と云
酒 和州の糯米を以て糯米と云 或云糯米を以て糯
古和州 糯米を以て糯米と云 糯米を以て糯米と云

△八束穗

然甚快也 ○神代卷曰其秋垂穎八握莫々
大言多之其葉 母は長岡村 和州の田 和州の田 和州の田

△干土稻

○字彙曰秣再生稻也 和同 ○唐韻曰秣自生稻也 ○順
和名曰秣 和名於路賀於 ○和州曰和州米 和州の田 也 ○和
和州曰和州米 和州の田 也

△落穗

利注滯遺棄之意也使收成之際此有滯漏之禾穗而寡
婦尚得取之為利也此見其豐成有餘而不盡取又与鰥
寡共之 和州の田 也

△中稻

七月早收者為早粳八九月收者為遲粳 ○今和州中稻
遲粳多也 早稻と晚稻の中稲を以て中稲と云 早稲早田或は晚
稲早田より中稲を以て中稲と云 和州の田

粟 五穀中子粒極小形似黍而色白者曰粟

△晚粳

○時珍曰十月收者為晚粳○此粳之類也○粳之類也○粳之類也

○獻良安曰凡稻西南地暖而早熟東北地寒故晚熟如
幾內則中和地以為正時八九月刈收者即中稻也自此
早為早稻遲為晚稻幾內及濃州尾州江州之產為上肥
後讚岐播州次之賀州能州米為飯多而而味芳矣奧州
津輕多肥土不用糞壤而能茂生稻長四五尺其米却不
美○私音仙一名占稻又名本綱曰私似粳而粒小始自
閩人得種於占城國宋真宗遣使就國取三万斛分給諸
道為種故今皆有之高仰州俱可種其熟最早六七月可
收有赤白二色与粳大同小異○良安曰私本此天竺之
種而宋時始積于中華而傳於本朝故呼曰大唐米今亦

西國多種之此米赤者多白者少故通稱糶音日向之產
烏赤色良薩广之產鮮赤色次之○此米之類也

○粟

○神代卷曰保食神願上生粟

說文曰粟嘉穀寔也从鹵从米粟之言續也○時珍本草
曰粟即梁也古者以粟為黍稷梁秣之總稱而今之粟在
古但呼為梁穗大而毛長粒粗者為梁穗小而毛短粒細
者為粟苗俱似茅早則有稈麥黃百日糧之類中則有八
月黃老軍頭之類晚則有雁頭青寒露粟之類○和名曰
粟和名○粟之類也

△秣

○時珍曰秣字篆文象其禾體柔
弱之形俗呼糯粟是矣梁米粟米之粘者可釀酒熬糖作
梁糕食之 多識篇曰秣今按毛○今又呼為秣

のまらむをりちまを考ふ林又稷米の一ふ之類類列すわりのほ
女澤よりやる

△ 狼尾草

○ 詩經註曰浸彼苞根注苞草叢

生也狼童梁莠属也○時珍曰狼尾其穗象形也秀而不
成窳然在田故有守田翁守田之称莖葉穗粒並如粟色
紫黃有毛荒年可采食許慎說文曰禾粟之穗生而不成
者謂之董節其秀而不實者名狗尾草○多識篇曰狼尾
草今案伊奴此惠 此乃似穀者今案伊奴此惠 中次移の之をひを移す考ふ
みまらむをりちまを考ふ物産のり信のりあまらむ

○ 稭

打田尔毛稭者好多雜有擇お我考及人篇 柳中
万十一 寄抄澤魚

○ 稭

○ 神代卷曰保食神眼中生稭

時珍曰稭苗如芟黍八九月抽莖有三稜開細蒼簇々成
穗如粟穗而分數岐如鷹爪之狀內有細子如黍粒而細
赤色其稭甚薄其味粗澀也周憲王曰稭搏采煮粥炊飯

磨麵皆宜○多識篇曰稭子比今按 ○和俗又粥一 固多 穀を

穀の下のく

△ 稭

○ 時珍曰稭莖葉粒穗並如黍稷

一斗可得米三升故曰五穀不熟不如稭稭苗似稭而
穗如粟有紫毛即烏禾也尔雅謂之藎音迭周憲王曰稭
有水稭早稭○多識篇曰稭今案久 ○けち種一 室の ぶ

△ 稭

○ 廣志曰菴音題穢草似稭布地

而生一名芟○順和名曰左傳注云菴比和 草之似穀者
也○是又穀の中にして今案久 稭尾の狗尾の如く今案久 稭稭
此中今案久

新云 稭の如く今案久 稭の如く今案久 稭の如く今案久 稭の如く今案久

○ 補文曰言稭と云ふは稭の如く今案久 稭の如く今案久 稭の如く今案久 稭の如く今案久

今乃以之而...
少所多人之...
...

○稷

又曰實注稷穀也一名稳似黍而小○說文曰稷乃五穀

長田正也此乃宮名非穀名也○時珍曰稷從禾從叕音

即諧声也又進力治稼也諸曰叕々良邦是也種稷者必

叕々進力也其米可供祭也禮記祭宗廟稷曰明梁爾雅

曰梁稷也黏者為黍不黏者為稷々黍之苗似粟而低小

有毛結實成枝而殊散其粒如粟而光滑三月下種五六

月可收亦有七八月收者其色有赤白黃黑數種稷熟最

早為五穀之長而屬土故祀穀神者以稷配社上古以厲

山氏之子為稷主至成湯始易以后稷皆有功於農事者
云○多識篇曰稷收今案○和例稷白子の子久之千子多と
以の千と也

△黍トコナ

苗似蘆丈餘穗黑色實曰重○時珍曰按許慎說文曰黍

可為酒從禾入水為意也沕勝之云黍者暑也待暑而生

暑後乃成也黍乃稷之粘者郭彘恭廣志有赤黍白黍黃

黍大黑黍牛黍燕黍馬草駝皮稻尾諸名俱以三月種者

為上時五月即熟四月種者為中時七月即熟五月種者

為下時八月乃熟詩云秬鬯一鹵則黍之為酒尚也○順
和名曰丹黍和名阿賀 和名久呂 秬黍和名久呂 秬乃毛智○和

△蜀黍トコナ

○時珍曰按廣雅荻梁木稷也蓋

此亦黍稷之類而高大如蘆灰者種始自蜀故謂之蜀黍

春月布種秋月收之莖高丈許狀似蘆荻而内實葉亦似

芦穗大如帚粒大也椒紅黑色博物志云地種蜀黍年久
多地○多識篇曰蜀黍今案俗云多字故養○和例蜀黍の...
信蜀

委の根をえしてその根をよの風を早に暴風をよの

玉蜀黍

○時珍曰玉蜀黍其苗葉俱似蜀

黍而肥矮亦似薏苡苗高三四尺六七月開花成穗苗心
別出一苞如梭與形苞上出白鬚垂々久則苞拆子出顆
々攢簇子亦大如梭子黃白色可燻炒食之○多識菡曰
玉蜀黍今葉多○和名如流傳由聖春時珍曰黍の根をよの

○胡麻七稜子

勝四稜者為胡麻都以為者為良白者為劣○時珍曰一
名巨勝即胡麻之角巨如方勝者非二物也其莖皆方秋
開白苞亦有帶紫艷者節々結角長者寸許有四稜六稜
者房小而子尤七稜八稜者房大而子多皆隨土地肥瘦
而然○讀齊諧記曰漢明帝時劉晨阮肇入山採藥食尽

見挑實食之身輕見一杯流出胡麻飯屑溪邊之二女子

嘆曰劉院元二郎至矣便巡歸留半載求飯○唐王維詩曰

御羹和石髓香飯進胡麻○順和名曰陶隱居本草注云

胡麻音五万本出大宛故以名之○大宛音五万曰其麻脂

麻巨勝子皆胡麻のふみ漢張騫西域使し時胡麻し

了し及胡麻しの角し子しをし法し或しはし胡麻しの角し

嶽良安曰胡麻有三色赤黑白共夏至半夏生之交下種六

月開花七月實熟家有早晚二種性惡霖雨其形狀皆如

上說本但白胡麻莖節々葉對生如車輪而葉蒼共色淡

以為異耳知々皆有之而多出於九列

○冬瓜

○王世懋瓜蔬疏曰天下結實大

者無苦冬瓜○時珍曰冬瓜以其冬熟也又賈思勰云苦

十月種者結瓜肥好乃勝春種則冬瓜之名或又以此也

三月生苗引蔓大葉團而有實莖葉皆有刺毛六七月開

△青芋

多識篇曰青芋今案豆
を好く芋利子と云く

○蕪恭曰有芋多子細長毒多

○是芋の一種也和俗曰芋のちくちく

△芋梗

括筆談云處士劉陽隱居王屋山見一蜘蛛為蜂所螫墜地腹鼓欲裂徐行入草啣破芋梗以瘡就嚙處磨之良久腹消如故○順和名曰蕪和名以毛如良○和俗曰芋のちくちく

○唐韻曰蕪芋莖也○慎微曰沉

△紫芋

之○時珍曰蓮禪芋魁大子也○李甫詩曰紫收岷嶺芋
白種陸家蓮和俗曰唐の芋と云く乃の好く好く好く好く

○蕪恭曰連紫芋毒甚正可煮食

△躑鴟

所伏○貨殖傳曰岷山之下有躑鴟至死不飢正義曰躑鴟芋也華

陽國志云汶山郡都安縣有大芋如躑鴟也

○顏氏家訓曰江南有讀誤本蜀

都賦注解躑鴟為芋不知為芋也人饋羊肉答書云損惠

躑鴟○本草曰芋魁又曰芋頭○或云躑鴟と云く乃の好く好く好く好く

不可限と云く芋の好く好く好く好く○補良安

曰粒芋共莖有紫理子小口味美○青芋俗云惠此亦有

二種一種其子如常而細長一種如薑而附生於魁味為

勝凡洗青芋宜用木枝以手剔手腕痛痒也能煮熟則味

勝於真芋末熟時如閑錫蓋則萎不可食○本朝食鑑曰

一種有蓮芋者莖有數小竅根亦同而如蓮之無絲味亦

俱好○一種有栗芋者生食其美不萎如生栗及烏芋煮

食亦肉實美

○薯蕷根

○杜甫詩曰充腹多薯蕷注有采
葉山中遂迷糧一差公与之一物如暑蕷後不復饑○
名醫別錄曰薯蕷二月八月采根暴乾○吳普曰山芋○

宗奭曰山藥○順和名曰山芋和名夜刀○大和草木山芋都名夜刀○大和草木山芋
山藥類之圃一も多作味中^さガ好^り山^はり^も作^り信^じり^も几
薯蕷類^の毎^年生^る他^の薯^蕷は^れ異^の好^り八月^の新^薯蕷^二種^を夏^秋新
根^の形^を新^薯蕷^の根^は根^の形^と同^く根^の形^と同^く
^の薯^蕷類^の好^りは^れ異^の好^り八月^の新^薯蕷^二種^を夏^秋新
根^の形^を新^薯蕷^の根^は根^の形^と同^く根^の形^と同^く
今^時種^は毛^の山^芋薯^蕷類^の好^りは^れ異^の好^り八月^の新^薯蕷^二種^を夏^秋新
根^の形^を新^薯蕷^の根^は根^の形^と同^く根^の形^と同^く

其薯
時珍曰其薯以二月種十月收
之其根如芋初時甚甜經久得風稍淡也按菴舍草木狀
云其薯薯蕷之類根葉亦如芋根大如拳○鎮江府志曰
佛掌薯○多識蒞曰其薯今案豆久○大和草木山芋薯
佛掌薯
は^れ異^の好^り八月^の新^薯蕷^二種^を夏^秋新
根^の形^を新^薯蕷^の根^は根^の形^と同^く根^の形^と同^く

△零餘子
藏書曰零餘子薯蕷子也大者
如雞子小者如彈丸薯蕷有數種此其一也○時珍曰零
餘子此即山藥藤上所結子也○順和名曰零餘子和名
古○薯蕷類之圃一も多作味中^さガ好^り山^はり^も作^り信^じり^も几
薯^蕷類^の毎^年生^る他^の薯^蕷は^れ異^の好^り八月^の新^薯蕷^二種^を夏^秋新
根^の形^を新^薯蕷^の根^は根^の形^と同^く根^の形^と同^く

付録
補良安曰薯蕷其根長尺許周二三寸灰
黃色肉白可莫食名之長芋江戸之產肥大而佳救荒本
草曰生山野中者藤類紫色葉似家山藥葉而大微尖根
比家山藥極細瘦硬皮色微赤名野山藥俗云自然生是
也不太滑味亦

不養病人 薯蕷類 溪邊出端時々感風水則變鰻見半變者
每食不妨 人往々有 ○佛掌薯葉比薯蕷葉團頗似黃獨葉而畧小
其根狀似佛手棋而肥大如攪漫者故名之鎮江府志所
謂佛掌薯是也薯蕷仙掌薯並呼曰山芋本草亦相混矣
然根葉異而長芋脆而粘少也仙掌薯研搗則正白色其
粘滑如藕傳火湯傷即愈又和未醬汁入青苔末搗調食
之如黃蜀葵之粘故謂之止呂々汁出於和州者良信州
亦可 ○女白良安其花を環疎芋と云ふれり也

△ 薯蕷

○鎮江府志云莖蔓蒼實絕類山藥葉大而稍凹根如
而有鬚味微苦邵武府志曰甘薯藤生葉類薯三月栽夏
開細花作穗淡紅色實乃別生不附於花形如勃臍而凹
黑色周圍有細凹點其點微高而中凹俗呼為糯八九月
熟土人採取食之謂其性暖能消食根頗麤大亦可食又

○本草曰土芋一名黃獨可蒸食

有一種其實皮光俗呼為和食之微不及於糯 ○張來明

道雜誌曰黃獨其根唯一顆而色黃故名 ○多識菴曰土

芋異名土卵 拾遺今或說保土 ○大和書曰世俗謂之何首烏

と云ふ也或曰延壽酒は 柚ふ水曰は何首烏也 次甘薯之又黃

獨も云ふなり 其の何首烏は 中より出ると苗薯蕷薯蕷

と名を授けたり 土芋又土團呪地重よ土芋土卵と他より 奥加藤種

の入りより 角黍土芋相違て食する 佳例とす 其の如く也 尺

より多識菴の保土は 芋之 是邵武府志より 亦有一種 芋實は 走

つるあり也 補 ○今柿は 志芋と申別より 出ると申別芋と云ふは 泥

て加州芋と云ふ何首烏薯蕷と云ふは 芋之 芋之 芋之 芋之

○補 良安曰 黃獨似仙掌薯而大色稍淡其零餘子似薯蕷之子而大

其根如芋魁而有硬鬚煮則皮毛自脫肉白味淡其養處

々皆有藝州廣嶋多出之 ○食鑑曰其色有黃有白黃者

味苦似草薺白者其不苦

○ 菜薺時

○ 時珍曰菘八月以後種之

△ 著薺時

○ 時珍曰蔓薺六月種者根大而

葉盡八月種者葉美而根小惟七月初種者根葉俱良

○ 大和物類曰蔓薺者葉重而根小又白也

○ 菜薺時 菜薺時 菜薺時 菜薺時 菜薺時 菜薺時 菜薺時 菜薺時 菜薺時 菜薺時

△ 摘菜時

○ 蕪頌曰蕪薺秋食莖冬食根

○ 謝靈運永嘉記云以小摘供日

○ 杜甫詩云自鋤稀菜甲

○ 小摘為情親注菜甲未盛小摘以情親也

○ 大根時 大根時 大根時 大根時 大根時 大根時 大根時 大根時 大根時 大根時

○ 時珍曰圃人種菜菔六月下一種

○ 凡種之候皆秋之節

○ 秋のころ根も小く菜も細く味も甘く

△ 摘大根時

○ 時珍曰菜菔秋采苗冬掘根

○ 是れ信菜菔の苗を挿て一畝を

△ 芥子時

○ 時珍曰芥有數種皆以八九月

○ 下種

○ 王世懋瓜蔬疏曰芥多種以春不若為芥一

○ 大和物類曰芥有種之先他芥より莖連く味亦佳

○ 栗則蒼盛而實繁

○ 蕪頌曰鑿栗九月布子

○ 救荒本草

日興粟隔年種則佳○和倍身乃可倍身乃可
日興粟隔年種則佳○和倍身乃可倍身乃可
日興粟隔年種則佳○和倍身乃可倍身乃可

